
ストライクウィッチーズ 二次創作

藤堂 輝男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 二次創作

【Nコード】

N7788M

【作者名】

藤堂 輝男

【あらすじ】

車に轢かれて死んだ一人のおっさん。

そんな彼が死ぬ間際に持っていたのは空を飛ぶ魔女たちが人類の敵ネウロイと戦っている物語だった……

この小

説は完全不定期更新です。なので更新は遅れますが、了承してください。なお、この作品は基本的には主人公というものはいません。比較的アニメで出てくるストライクウィッチーズメンバーはレギュラーですが、それだけです。

Prologue

突然だが、俺は死んだ。

いや、嘘じゃない。

その証拠に、俺は自分の死ぬ時の光景をはっきりと覚えている。

俺はしがないサラリーマン（32）で、今日も今日とてあくせく働いて、家に帰って鋼鉄の咆哮³をやるつもりだったのだ。

だが、そのついでに本屋に寄って、ストライクウィッチーズの小説を買って帰る途中、俺は車に撥ねられた。

まあ普通に即死、痛みを感じる暇もない。それでその時に俺が見たのが、吹き飛ばされて中に浮いている時に、俺と一緒に落ちて吹き飛ばされたストライクウィッチーズの小説だった……考えてみたら死んでも死に切れないかもしれない。ハズすぎる。

まあ自分が死ぬ時の光景を覚えているってのも考えてみれば変な話なのには違いない。

そも、今こうして話している事自体がおかしな事なのだから。

しかし信じてほしい。

俺は確かに一度死に、そしてそんな俺が今いるのは何も無い空間だ。

……ああいや、何も無いというのは些か語弊があつたな。

実は俺の前にはもう一人、何だか神話に出てくるような衣装を着た女がいた。

「誰だあんた」

俺の質問に、その女は困ったような顔をして俺にこんな事を言ってきた。

「あら？ひょっとして私、間違えちゃったかしら？

うーん、どうですか？貴方の名前は『三木 宗明』であってますか？」

「違う、俺の名前は『三浦 明』だ。そんな名前じゃない」

言ってきた名前が俺には聞き覚えのないものだったのでそう返すと、女は目に見えて慌て始めた。

「やだ！どうしましょう！？……私としたことがまさかこんな初歩的なミスをやらかすなんて……………」

慌てたと思ったら、今度はそう言ってぶつぶつと何やら独り言を言い始めた。

……………ミス？

そういえばこいつ、神様みたいな衣装を着ているな。

んで、俺が死んでいるのは俺自身が記憶している。

そしてこんな空間ははっきり言って現実ではありえない。

……………まさか、これって噂に聞く二時創作物の転生SSテンプレみたいな感じなのか……………？

さっきミスとか言ってたし、どうやらその可能性が高そうだな。

まったく、三十超えてこんな奇天烈な展開に遭遇するとはな。

「おいあんた」

だからそう思っただけから先程からブツブツ言っている女に声をかけると、すっかり俺の存在を忘れていたのか物凄く驚いてこっちを見てきた。

「あんた、まさかと思うが神様？」

「え〜っ!?!?ど、どどどどうして分かったんですかあ〜!?!?」

そんな俺の指摘に再びテンパっておろおろする神様（仮称）。

「〜か、あれだ。ミスで俺の事殺したんだったら、転生させてほしいんだけど。」

「まあまあ、落ち着いてくれませんかね？」

「は、はい……すう、はあ、すう、はあ」

俺がそう言う事によって漸く落ち着きを取り戻した神様（仮称）。

……

……

…

「で、貴女は俺を間違えて殺してしまった、そういう事ですね?」

「はい……申し訳ありません」

「ああ、もういいです。その事については。肝心なのはこれからど

うするかという事ですよ」

「これから……?」

俺の言葉に先程から若干涙目になっていた女神様は、その涙目のままで俺の事を見上げる。

「そうです。貴女はどうやら間違いで私を殺してしまったようですが、貴女の先程からの様子からするとどうやら神の世界も仕事のミスには厳しいようですね?」

「そうなんです……ああいう人間の命を扱う仕事に携わるには、最低でも十年間の研修が必要で……今日が初めての仕事だったのに、これじゃあまた研修生からやり直し、いえ、最悪墮天させられるかも……」

女神はそう言った後、頭を抱えてまたブツブツ言い始めた。

しかもそのブツブツの中には、『可哀想だけど私の未来の為にこの人には犠牲になってもらいましょうか……?』などの物騒な呟きも混じっていた。

差が激しいな、おい。

しかしそんな事になっては取り敢えず面白くないので一言。

「待つてもらいたい、別に俺をどうこうしなくても助かる方法はある」

「え!?!ほんとに!?!教えて教えて!?!」

俺の言葉に即効で喰い付いてくる女神(笑)。

「ああ、教えてやるとも、その方法はな……俺を転生させる事だ」

だから俺が堂々と言ってやったら、女神（笑）は暫く考え込んだ後、うん、と頷いて決心を固めたようだった。

「つまり、貴方と私は共犯者、そういう事ですね？」

「流石神様、理解が早いですな」

「ふふ、それほどでも」

でも……、と女神は話を続ける。

「転生先は、貴方に縁のある世界以外はいけませんよ？」

女神はそういつて困った様子だが、ふっ、そんな事は予測済みだ。

「縁のある世界ならある。鋼鉄の咆哮の世界と、ストライクウィッチーズの世界があるだろう？ 鋼鉄の咆哮は俺が生前よくやっていたゲームだし、ストライクウィッチーズなんて死ぬ時に持っていた本だぞ？」

「えーっと、少々待ってくださいね？……ストライク、ストライク……と、あった。じゃあ次は……鋼鉄の咆哮ね、鋼鉄、鋼鉄……これも発見、っと。」

はい、貴方の言っている世界は確かに見つかりましたが、貴方はどちらの世界に転生するのをお望みですか？」

いや、常識的に考えてストライクウィッチーズでしょ、確かに三十過ぎのおっさんが行く所としてはかなり危ないかもしれないが、それでも超兵器なんていうトンでも兵器が大量にある所なんかで生きていくよりはよっぽどマシだ。

というより鋼鉄の咆哮の世界は、ウィッチーズの世界より普通に生存率低いはずだ。

「ストライクウィッチーズで」

「わかりました、ではその世界に転生させますが、何かして欲しい事はありますか？流石に着の身着のまま送り込むというのも、私が元々やらかしてしまっただ事ですから申し訳ないですし……」

ふむ……ならあちらの世界での拠点とかもらえるのかな？鋼鉄の咆哮に出てきた浮きドックとかを転移させて、みたいな。他にも鋼鉄の咆哮の時に俺が作った艦なんかをさらに改良、強化したりとかは？

「可能です」

なら、うん。決めた、こうしよう。

「今から俺が要求するものをよく聞いておいてくれよ？まずは

」

S I D E : 坂本美緒

私は先程、空母《赤城》に戦争に参加したくないという宮藤を残して、ウィッチとして単身で空に身を翻らせている。

本来、私と宮藤は《赤城》に乗って、これからブリタニアに行く予定だった。

だが、あと少しでブリタニアに着くという時、私は空へ上がらなくてはならなくなってしまった。

理由は人類の敵、ネウロイが現れたからだ。

ネウロイは、1939年何の前触れもなく我々人類の前に現れ、瞬く間に人類の領土を侵略していった。

そんな存在に対し、徹底抗戦に打って出た人類が対ネウロイ用を開発した新兵器がストライカーユニット、そしてそれを装備し、戦うために世界各国から強大な魔力を持つウィッチが集められた。

そしてそんな存在であるネウロイに対抗するウィッチの一人でもある私が、今こうしてネウロイに襲撃されている最中に艦内にいる訳にもいかない。

「ネウロイは、コアを潰さなければ倒せん」

私は戦闘脚22型甲でネウロイの迎撃に飛び立って、率いている戦闘機隊に無線で指示を発していた。

「戦闘機隊は、敵ネウロイのコアを探しつつ、敵の攻撃を攪乱せよ

「！」
「了解！」

左右に展開する戦闘機隊。

私はそのままビームをかわしながら上昇し、ネウロイの真上へ出る。

「上がから空きだ！」

高空からネウロイを見下ろし、ふっと口元に笑みを浮かべる。

艦隊に向けてビームを乱射する巨大なネウロイの上方には、砲台らしきものがまったく見当たらない。

地上攻撃に特化した、というところか

かすかに感じる違和感。

私はそれを振り払って口元に笑みを浮かべると、右目の眼帯を押し上げようと指をかけた。

普段は隠しているそこは、ネウロイのコアの場所を見抜く事のできる特殊な目　　所謂魔眼なのだ。

だがネウロイとの戦闘では絶大な効果を発揮するであろうそれは、今回は発揮されなかった。

なぜならその目が効果を発揮する以前に、ネウロイが私に対してビームを照射したからだ。

当然、私はシールドを張って防ぐが、近くにいつまでもいたらその

うちビームはシールドを突破して私の体にぶつかるだろう、そうすれば空中に日本人という素材でできたステーキが一つできあがることになる。

私はいったんネウロイから距離を取り、舌打ちした。

そんな私の両翼を、扶桑皇国戦闘機隊が通過していった。

……

……

…

S I D E : 《赤城》艦内

「状況は」

艦長は坂本の発艦を見送ったのち、艦橋から戦闘機隊及び坂本から送られてくる報告をやりとりしている部下に尋ねた。

「直掩隊とネウロイの戦闘が始まりましたね」

航空参謀がそれに短く答えた。

窓から空の戦況を確認すると、そこでは丁度ネウロイがビームを雨霰と乱射して赤城所属の戦闘機隊を墜としている光景だった。

直掩隊による迎撃は絶望的だった。

合計で十機近い96式艦上戦闘機一撃で落とされる光景が網膜に焼き付き、そうして見ている間にも次々と味方の戦闘機が墜とされてゆき、さらにネウロイは赤城にまで攻撃を仕掛けてきた。このままでは後五分もあれば戦闘機隊は全滅するのじゃないか？そう思いながら被害状況を聞く。

「被害状況知らせ！」

「八番機銃損傷！機関室にも、被害が出ています！！」

艦長はそれに了解、と返して再び空を見上げる。

内心、もう今までの戦闘機ではネウロイにとってはただの的にしかならないと思う、それもこれもすべてウィッチの装備に努力と金を傾注させ過ぎた所為だ、とも思う。

そう思っただけ深い溜息をつきながら考えていると、どうやら通信兵が援軍の知らせを持ってきてきたようだ。

報告がきた。

内容は、ひとつはブリタニアからのもので、

「第501統合戦闘航空団が本艦隊に向け発進、到着まで約二十分」というものと、

「我、《リライアント》。これより戦闘に加入する」

という誰もが予想だにできなかったものだった。

彼らは来たのだ。

《リライアント》は、巨大な空母だった。

いや、ただの空母ではない、それは一目で分かるほどの異形だった。何故かといえば、その空母はこの時代の空母に採用されている直線型甲板ではなく、後代、およそ六十年後の大型空母に一般に採用されているアングルドデッキ方式甲板だった。

おかしいのはそれだけではない。《リライアント》は、二つの船体を連結させた、所謂双胴式船体というヤツなのだ。

そんな《リライアント》は、見かけの形も異常なら大きさも異常だった。

全長は300mを超え、全幅も100m超えている。

どう考えても、《赤城》や扶桑皇国の誇る世界最大の戦艦《大和》よりも巨大だ。

そしてその巨大な双胴空母を旗艦とする計四隻の小規模部隊は、これよりネウロイとの交戦可能区域に入ろうとしていた。

……

……

……

登場人物・兵器 ここは随時更新されます

ここは話が進んでいくにつれ、随時更新されていきます。

人物：

【三浦 明】

所属：浮きドック兼、島 国名【日本国】（決定しました）

階級：大将相当（たぶん） 陸海空大元帥（天皇みたいな？実権伴
つてるけど）

身長：176cm

年齢：32歳

艦艇：

『双胴空母《リライアント》級要目』

基準排水量 10200トン

全長 336メートル

全幅 102メートル

機関出力 35000馬力（反応動力推進式）

最大速度 44ノット

兵装：

8連装ミサイル発射機×2
シースパロー短SAM×2
SAM/SUM発射機×2
30ミリ機関砲(CIWS)×4
新型対空パルスレーザ×4

補助兵装(特殊なヤツだけ、勿論性能は全部MAXで)
無限装填装置

電磁防壁

防御重力場

超イージスシステム

搭載機：124機

カタパルト：二基 蒸気方式 電磁方式

エレベーター：舷側五基 油圧方式

同型艦：

《リライアント》

『護衛艦《ウースター》級要目』

基準排水量 12400トン

全長 186メートル

全幅 22メートル
機関出力 185000馬力（反応動力推進式）
最大速度 40ノット

兵装：

小型レーンガン×1
特殊弾頭ミサイルVLS3×2
対艦ミサイルVLS3×13
対空/対潜ミサイルVLS3×15
20mm機関砲（CIWS）×4

補助兵装（同上）

同型艦：

《ウイスター》
《ロアノーク》
《ファアゴ》

『新型駆逐艦《弓月》級要目』

基準排水量 7100トン
全長 120メートル
全幅 13.6メートル
機関出力 80000馬力（通常動力推進式）
最大速度 34ノット

兵装：

60口径12.7cm連装両用砲 4基

40mm4連装機銃 4基

40mm連装機銃 8基

20mm連装機銃 9基

新型対潜口ケツト 4基

同型艦：二十四隻

『大型装甲空母《飛鶴》級要目』

基準排水量 52000トン

全長 298メートル

全幅 43メートル

機関出力 22000馬力（通常動力推進式）

最大速力 32ノット

兵装：

60口径12.7cm連装両用砲 16基

40mm4連装機銃 26基

40mm連装機銃 19基

搭載機：136機

カタパルト：二基 蒸気方式

エレベーター：舷側五基 油圧方式

同型艦：

《飛鶴》

《蒼鶴》

《雲鶴》

《天鶴》

『航空機《アーク・バード》級要目』

乗員： 4人

全長： 300・00メートル

全高： 25・00メートル

全幅： 115・00メートル

最高速度：

大気圏内 12,575 km/h

衛星軌道上 20,864 km/h

兵装：

X線レーザー・宇宙対応型 x 1

近接防御用パルスレーザー x 32

反物質ビーム砲・宇宙対応型 x 2

超怪力線照射装置・宇宙対応型 x 8

補助兵装：
無限装填装置
電磁防壁
防御重力場

搭載エンジン：特殊航空兵器用反応炉？

推進システム：マス・イオン・ドライブ

同型機：

《アーク・バード》

『空域管制機《東海一型》要目』

乗員： 30人
全長： 70.20メートル
全高： 5.00メートル
全幅： 51.28メートル
最高速度：
758 km/h

『対ネウロイ制圧用五式戦闘攻撃機型要目』^{ソロル}（これ、要は武装神姫に存在する『アーンヴァルトランシエ2』の名前を変えたただけですので、あしからず）

全高： 156・00cm

最高速度： 1,264 km/h

兵装：

アーンヴァルトランシエ2と同タイプの物を各種。防具も同様。

補助兵装： コア制御補助装置

搭載動力：NCドライブ^{ネウロイス・コア}

捕獲したネウロイのコアを統合戦略研究所にて研究、コアを搭載する素体とコアを接続する事でコアが生み出すエネルギーを転用、動力に変える為の機関。このコアから素体を通して武装へとエネルギーを供給する事によって、レーザーの発射が可能になった。

また、この機体は統合戦略研究所が推し進めている『プロジェクト・ソロル』の先駆けとする為の、いわば試験機であるので同型機は存在しない。

登場人物・兵器 ここは随時更新されます（後書き）

駆逐艦の排水量変更致しました。

20100801 / 追記しました。

20101120 / 追記しました。

20101122 / 追記しました。

第一話（前書き）

ここで軽く設定の話をつつ、女神が渡した人工の島は、巨大な戦艦クラスの船を五隻ほど同時に、約一時間ほどで造り上げる事のできる、超チート仕様となっておりますが、そこはご容赦を。

第一話

SIDE：《リライアント》CDC

「ネウロイと《赤城》の状況はどうなっている？」

三浦は短く艦の管制AIに尋ねた。その顔には生まれて初めての戦闘（例え艦内に居るとしても、だ）からくる不安があった。

「直掩戦闘機隊はほぼ壊滅。ウィッチー一名が残存」

AIがディスプレイに戦況を示した。

モニターには艦艇を示す三角形と航空機を示す矢印、さらにウィッチーである事を示す菱形、そしてネウロイを示す五角形があった。

そのうちネウロイを除いたマーカーの色は全て青だ。当然だろう、今この場で敵として認定すべきモノなどネウロイ以外に存在しないのだから。

状況はAIの言った通り、芳しくないようだった。

その証拠に、航空機を示す矢印はほぼ無くなっていた。いや、今こうして見ている間にまたネウロイからの攻撃でも受けたのだろう、矢印は無くなった。全滅だ。

くそ。三浦は思う。しくじったな、もつと早くにドックから出撃するべきだったか？いや　三浦は考え直した。

そうだ、あの時はまだ今こうして護衛についている《ウースター》級も、今現在俺が乗っている《リライアント》も設計、建造が完了していなかったじゃないか。どのみち無理な話なんだ。それに、今

だって無理をしている事に変わりはない。

そう、彼は死んで転生する時、女神との交渉において鋼鉄の咆哮に出てくるドック艦、及び移動式の島を拠点として入手していた。そのついでに島を国として世界中に認知させるよう、工作も行ってもらった。

その結果として歴史改竄をあの手がやった所為で随分酷いことになっているようだが、今はそんな事を考えている時じゃない。

その拠点内では艦船の設計、建造及び兵装などの生産から、日常生活に必要なありとあらゆる物の生産も行っている、つまりは何も無い海上に、いきなり小さな移動式の国が現れたと考えるのであればいい。

そして三浦はその島内で一時間ほど前まで、今自らの乗艦している双胴空母リライアントと、その護衛の大型駆逐艦ウースターを設計、建造していた（スペックは登場人物を参照の事）。

だが生憎今回のネウロイの襲撃は比較的すぐに起こる事でもあるし、なにより艦の設計に思ったより時間をかけすぎた所為で、航空隊を編成できず、搭載する事は出来なかった。

なので三浦は《リライアント》に航空隊を載せないまま、護衛艦三隻のみを引き連れてこの戦場に到着したという訳だった。

彼はCICにある、ゆったりとした艦長席に座りながら思う。仕方がない、戦闘は《ウースター》らに任せるしかないな。

確かに、この場合の戦闘は《ウースター》以下三隻の護衛艦に委ねるべきだった。

別にこの空母にネウロイを攻撃できる兵装が無い、ということではない。むしろ鋼鉄世界では対艦兵装として使われていた8連装ミサ

イルなど、どう考えてもウィッチたちの武器より攻撃力の高いモノや、新型対空パルスレーザーなどの未来兵器まである。

しかし航空母艦が自ら敵を積極的に攻撃するなんて気違いじみた事はやるべきではない、という考えを持つ三浦はその考えの元、新たに命令をくだした。

「戦隊各艦に伝達。使用許可兵装は小型レールガンのみ。仕留める必要はない。せいぜい注意を引き付けるだけにしろ」

そんな一見無茶とも思える三浦の命令に艦のAIは短く了解、と応えた後、現在《リライアント》を護衛している三隻、《ウースター》、《ロアノーク》、《ファーゴ》に命令を伝える。

そしてその命令が伝えられると同時に、護衛の各艦の艦首に備え付けられた連装式の小型レールガンが先程から空を浮いて扶桑皇国艦隊と戦闘を繰り返しているネウロイを照準する。

あ、畜生、また駆逐艦がやられた。こりゃ俺の艦で護衛してブリタニアに送るしかないな。なに、拒否なぞしてこないだろう、あれだけの損害を被っているんだからな。

ちなみに、三浦が設計して造らせた艦はどれもAIが制御している。なので実質誰一人乗ることもなく（げんに護衛艦には誰も乗っていない）航海が可能だ。

そして三浦はそんな戦闘準備を着々と整えていく護衛の各艦を見て思う。

頼もしいな、これならば俺でもこの世界で生きていく事ができそうだ、と。

S I D E : 《 赤 城 》 上 空

「二十分か……」

空母の甲板から上げられる発着信号を見た坂本はつぶやいた。

この猛攻の中であと二十分……だがウィッチーズとは別に艦隊も増援として来たかと？一体どこの艦隊だ……？

坂本を守るシールドにまたビームが当たり、明滅する。

シールドの限界が近い。

「みんなが来るまで、なんとしても保たせる！」

ウィッチの仲間には絶大な信頼を置く坂本は、そう己を鼓舞すると、99式22号13mm機関銃を構え直した。彼女にとっては見も知らぬ艦隊よりも、ウィッチの仲間たちの方が信頼できたのだ。

……

……

…

SIDE：《赤城》艦橋

「ウィッチが来るというのはわかるが、《リライアント》とはどこ
の艦だ？半端な艦ではこちらと同じようにビームの的になるだけだ
ぞ」

先程の援軍の知らせに今まで聞いた事のない艦名があったので報告
を持ってきた通信兵に尋ねる。

「はっ、それが……所属はどうやら日本のようです。先程返信した
ところそう返ってきました」

「日本だと？一体何故あの国の艦がここに……」

日本　いつから存在していたのか、誰にもわからず、判ってい
るのは移動式の島を国土として持つ事と、その尋常ではない科学力、
そして国民は、ただ一人を除いてそのすべてがロボットで構成され
ているという異常な国。

ネウロイが襲来してきて、世界の国々がどれだけ頭を下げて頼み込んでもどこの国に対しても軍を派遣せず、一切戦争に関わろうとしなかったその国の艦が今更この海域に何をしに来たというのだろうか。

艦長はそう思ったが、同時に淡い期待も抱く。

あの国の艦ならなんとかなるかもしれないな。

そしてそんな艦長の期待は実現した。

何故ならその二分後、ネウロイを射程内に納めた《ウースター》以下《リライアント》護衛の三隻が、ネウロイに対して艦首に一基備え付けられた連装小型レールガンを、今回は三浦の指示でほぼ駆逐艦の主砲と同じ速度で、速射し始めたからだ。

……

……

…

S I D E : O T H E R

《ウースター》以下三隻の護衛艦がネウロイに射撃を開始してからの展開は、先程までの戦況とは違い、ネウロイが艦を圧倒するようなものではなかった。

三隻の護衛艦が最大射程に近い、距離39kmで放った第一射は、電磁加速により凄まじい速度を得て突進し、そのうち命中した三発の砲弾は、ネウロイに着弾すると同時に先程までの皇国艦隊の受けていた屈辱を何倍にもして叩き返した。

命中した三発の砲弾は、今まで扶桑艦隊を苦しめていたネウロイに対し、以下のような効果を發揮した。

巨大なエイのようなネウロイに命中した最初の一発はネウロイの先端に命中、その先端を吹き飛ばした。

中央部に当たった一発は、そのまま中央部を貫通、ネウロイに大穴を開けて通り抜け、電磁加速による摩擦で燃え尽きた。

最後の一発は中央部に当たった前の一発の穴のすぐ横に連結した大穴を開けた。

そしてそれらの砲弾による攻撃は毎分45発という速度で飛来しつづけ、それはネウロイに新たな敵が現れた事を告げるには充分だった。

……
……

：

S I D E：《赤城》艦内

放り出された救護袋から包帯が零れ落ち、そのまま転がって、艦内通路に何本もの白いラインを描いていた。

ギシギシと軋む艦体。

あまりの揺れの激しさに、芳佳は立ち上がることができず、その場にペタリと座り込んだままだ。

「人が落ちたぞ！」

「手隙乗員は直ちに救助！五分隊、左舷機銃へ！」

「機関室、浸水！」

「どうなるんだよ、この船！？」

「落ち着け、どうやら日本の艦隊が来てくれたらしいぞ！」

「あんな国信用できるか！」

「そうだ！今まで俺たちがネウロイと戦っている間、どこの国にも救援を寄越さなかった国だぞ！？」

伝声管を通じ艦内各所からの錯綜した絶叫が響き渡る。

その中には、今救援として戦っている三浦の率いている艦隊を罵倒するものもあった。

それらの声に混じり、芳佳の耳に、先ほどの衛生兵と、坂本の声が聞こえてくる。

「ここは、お前みたいな子供の居る場所じゃないんだ！」
「そこはお前の場所じゃない、邪魔になるだけだ！」

そうなの……かな

うつむいたまま、壁に手をつけてゆっくりと立ち上がる。

「私にできることなんて、何もない……のかな？」

芳佳が力なくつぶやいた、その時。

S I D E : 《赤城》上空

ネウロイのビームが、《赤城》を直撃した。

先ほどから猛烈な射撃を継続している他国の艦隊 《赤城》からの発行信号で日本の艦隊ということが判明しているビーム、その流れ弾のようなものだった。に撃たれて正直な所、運が悪かったとしか言えない。

そしてそのロンギヌスの槍のようなビームは、甲板と、その下の格納庫を貫く。

分厚い鉄板が消失した円形の穴。

その奥で誘爆が発生し、凄まじい衝撃が艦橋を、芳佳のいる通路を、《赤城》全体を襲う。

「しまった！」

黒鉛を上げる《赤城》を見下ろした坂本は、インカムで芳佳に呼びかけた。

内心、ネウロイの攻撃が日本の艦隊に移ったことで油断した自分を罵倒しながら。

「宮藤！ 宮藤！ 答えろ、宮藤！！」

……

……

…

SIDE：《赤城》艦橋

扶桑皇国遣欧艦隊の被害は、限界に達しつつあった。

「もはや、これまでか」

折角日本の艦隊が引き付けてくれたというのに、ネウロイは時折思い出したかのようにこちらに対してビームを照射してきた。

そのため、遣欧艦隊の被害は増え続けていたのだ。

重苦しい空気の中、《赤城》の艦長は帽子を目深に被り直し、決断を下す。

「……総員に、退艦命令を……」

だが……。

突然、甲板に視線を向けていた副長が叫んだ。

「だ、誰だ、あれは!?!」

「どうしたというのだ、副長」

副長を振り返る艦長。

「発艦エレベーターに、誰かいます!」

「なんだと?」

艦長も甲板に目をやる。

奇跡的に生き残っていた中央の発艦エレベーターが起動して、何か
がせり上がってくる。

白煙に包まれたエレベーター上に立つのは、ひとりの少女。

「私にできること……」

使い魔と一体化した証である、犬耳と尻尾。

「約束を守るため……」

足には、零式艦上戦闘脚22型甲。

「みんなを守るために!」

そこにいたのは、決意の表情で空を見上げる、宮藤芳佳の姿だった。

「おい、あいつは誰だ？副長、なぜストライカー・ユニットを装備できる？」

驚いた艦長は近くにいた副長に尋ねた。

「坂本少佐が連れてきた少女です。名前は……」

「宮藤芳佳です！」

顔を上げる宮藤。

「宮藤だと？」

艦長は息を呑む。

「まさか……あの宮藤博士のか！？」

S I D E : 《リライアント》 C D C

今現在目の前で繰り広げられている光景は、確かに感動するところなのかもしれないが、目の前にいる敵を無視して繰り広げられるそのドラマは、三浦にとっては悪い冗談でしかなかった。

敵を無視して他のものを見るなんて、最悪死んでしまうからだ。

そのくらい、例え現代日本で戦記物の小説を読んでいるだけだった三浦にだってわかる。

その証拠に、三浦の率いている艦艇は先程からも引つ切りなしにネウロイのビーム攻撃を受け続けている。

幸い、引き連れてきた全艦には高性能の電磁防壁を装備してあるため、被害らしい被害は出ていない。だが、いい加減その効果の無い攻撃を自分の艦に打ち続けてくるネウロイに嫌気が差していた三浦は、新たな命令を下すことにした。

「おい、もう手加減してやる必要はないぞ。いい加減手加減しているとネウロイを付け上がらせる事になる、全兵装使用自由」

その新たな命令を受け、管制 A I はネウロイに新たな攻撃を加えるべく、戦隊各艦に命令を伝えた。

そしてその命令の後おこなわれた攻撃は、この世界の人類の海戦史上初となるであろうアクティブ・ホーミング式対艦ミサイルによる飽和攻撃だった。

.....

.....

.....

第二話

SIDE：《赤城》上空

「守りたいんだらう?」

「……はいっ!」

坂本の問いに芳佳が頷き、二人で協力してネウロイを攻撃しようとした時、先程から小型レールガンを撃っていた日本の艦隊から通信が来た。

年の頃は20程と思われる男の声だ。

「こちら《リライアント》、我が艦隊はたった今ネウロイに向けてミサイルを発射した。インパクトは約20秒後。現在ネウロイと交戦中のウィッチに告ぐ、直ちに離脱せよ、直ちに離脱せよ。終ワリ」

その不可解な通信に一瞬坂本は眉根を寄せるが、日本艦隊の方角

距離は20km程だ　　を見て、絶句した。

「な、何だ、アレは!」

その日本の艦隊は、艦上から凄まじい白煙を巻き上げながらこちらへ突進してくる細長い筒状の物体を雨霰と発射したからだ。

……

……

…

SIDE：《赤城》艦橋

戦闘が終わった後の《赤城》艦橋で各部署の損害の報告を受け取っていた副長が呻いた。

「くそ、なんて事だ。艦長、こりやだめです。駆逐艦は殆ど全滅してますし、この艦だって機関がやられちまってます」

「ああ、これでは《赤城》は自力航行できん。最悪、この場で自沈、というところだろうな」

副長に答えながら艦長は先程までの光景を思い浮かべる。

先程の日本艦隊の使った噴進弾（この時点ではまだミサイル

つまり誘導能力がある　とは気付いていない）によってネウロイは跡形もなく消滅した。

ネウロイに対して突進していった約200発の噴進弾　途中で

迎撃されて120発程に減っていたが　はネウロイに命中して、その炸薬の爆発力と速度を使った突進力によってコアごと吹き飛ばしてしまったのだ。

それは、ウィッチによる精密な破壊によってコアを壊すのが普通だと考えていた艦長のような人間にとっては自らの視野を広げるには充分な機会だった。

「これからの時代……もはやウィッチなど必要ない日が来るのかもしれんな」

世界中に存在を知られていながら誰一人としてその国土を踏んだ事がないという正体不明の国、日本。

1939年に人類の前に突然現れ、それから今日まで人類の敵であるネウロイ。

そのネウロイに対抗するため、人類が必死の思いで作り上げたストライカー・ユニット。

妙な時代になったものだ。艦長 杉田は自分が年若い中尉であった頃を思い出した。

戦艦、そして国家対国家の戦争が全てのように言われていた時代。すべてが主砲弾と水雷夜襲による一大決戦だけで決せられる戦争が信じられていたあの頃。

それは、航空歩兵のウィッチたちが現れてからも、決して崩されることのなかった海に生きる男たちの幻想。

それからわずか15年でここまで変化してしまうとは。

そして自分は、その変化した戦争を先程この目ではつきりと見た。人類が必死の思いで作り上げたストライカー・ユニットも、日本の科学力の前ではただの玩具に等しい物でしかなかったのだ。

日本の科学力・生産能力ならば、おそらくはあれほどの兵器を、たった一体のネウロイにあれだけの量使用しても余りあるのだろう。そして俺の祖国には、いや、この世界のどこを探しても日本に対抗できるだけの力を持った国など存在しない。

その艦長の呟きは、誰にも聞かれることはなかった。

しばらくして通信兵が報告を寄越した。

「艦長、《リライアント》が曳航を提案してきましたが、どうされますか？」

「そうか、ここはありがたく引つ張っていつてもらおうとしよう。《リライアント》には宜しく頼むと返しておけ」
「はっ！」

艦長からの命令を受け、走り去っていく通信兵を見ながら思う。

あいつらはきつと恐らく日本艦隊のあの攻撃力を見てもまだウィッチこそが対ネウロイにおけるの最高戦力だと考えているのだろうか、いや、たぶん考えているのだろうか。

艦長はそう断じて、傷ついた《赤城》を曳航する為にこちらへよってくる《リライアント》を見た。

それにしても、先程のネウロイのビームを弾いていた防壁、アレがあればネウロイ戦における人類のアドバンテージは確固たるものになるのじゃないか？

結局、最後は人間同士の間で使われるのだろうかけれども。

.....
.....

：

S I D E : ウ イ ッ チ ー ズ

「ね、ねえねえさっきのあれって何ッ!? といつかあの艦デカ過ぎでしょっ!？」

と破壊されて落ちていくネウロイを見ながら騒いでいるのは、艦隊救援に急行した、ストライクウィッチーズ、ロマーニヤ公国出身のフランチェスカ・ルツキー二少尉だった。

ストライカー
飛行脚 G 5 5 チェンタウロを駆るルツキー二。

そのルツキー二の視線は、ネウロイを破壊したミサイルを放った日本艦隊に向けられていた。

「カールスラントの武器に似ていたが、どうやら違うようだ。カールスラントのロケットでもあそこまで凄まじい破壊力はない。というかカールスラントはそもそもあそこまで巨大な艦は保有していなかったはずだ。持っているとしたらせいぜい扶桑かブリタニア、それかりベリオンくらいだろうな」

冷静な声でルツキー二の質問に応えたのは、カールスラント出身のゲルトルート・バルクホルン大尉。

使用飛行脚は F w 1 9 0 - D 6 プロトタイプ。

瞳に憂いを湛えた黒髪のバルクホルンは、250機撃墜を誇る、ウィッチーズのエースの一人だ。

「いいえ、ブリタニアにもあんな巨大な艦はありませんわ。たぶんあそこまで巨大な艦は世界のどこの国も持っていないのじゃないですか？」

そんな話をしていると、不意に《赤城》から発光信号があった。

「ん？おい、《赤城》が信号を出してるぞ。なになに……我が艦は現在飛行甲板損傷のため着艦不能、よって坂本少佐、ならびに宮藤軍曹は空母リライアントに着艦されたし。だとさ。我々もそこに着艦するよう、指示が出ている」

バルクホルンは信号の内容を読み上げる。

「坂本様！ご無事ですか！？」

そんなバルクホルンを見無視して、坂本の姿を求めて落ちてゆく巨大ネウロイに向かって加速するのは、ペリーヌ。

「ペリーヌの奴、どさくさに紛れて少佐に抱きつくつもりだよ。…

…ん？」

そんなペリーヌを笑っていたルツキーニは、ネウロイの上方に坂本の姿を発見した。

あれって……

ルツキーニの瞳に映る坂本の腕の中には、抱きかかえられた芳佳の姿が。

……東から来た、新しい魔女ってこと？……ふうん、あの巨大空
母といい、ちょっとは面白くなりそうじゃない？

「あら？」

ペリーヌも芳佳に気がつく。

「な！ななな、何ですのアレは！？」

自分以外の少女が坂本の腕に抱かれているのを見たペリーヌは、顔
を真っ赤にして憤慨する。

ペリーヌにとって坂本は、恋愛感情に近い崇拜の対象なのだ。

「誰なんですかーっ！？」

……

……

…

SIDE：《赤城》上空

「ん……あれ……？」

粉々に吹き飛ばされ、雪のような欠片になって舞う元巨大ネウロイ
を背景に、芳佳は目を覚ました。

「気がついたか？」

「坂本さん」

「すまなかつたな。まさか日本艦隊があんな物を撃つてくるとは思わなかつた」

坂本は申し訳なさそうな顔をする。

「私の方こそ、逃げるのが遅れたのに助けてもらって、迷惑をかけてしまいましたし」

芳佳たちを無視して日本艦隊の方に向かっていったネウロイを、芳佳はぼんやりと思い出す。

さっきの攻撃、あれって日本の兵器だったんだ……。

「何言ってるんだ。初めてでいきなりあんな物が自分たちの方向に飛んできたら逃げ遅れて当然だ。実際、私も一瞬肝が冷えたしな」

坂本はそう言いながら、洋上の空母や救命ボートを見る。

激戦を生き延びた空母の甲板には、先程の攻撃でウィッチたちのみを案じていた兵たちが、手を振る姿。

「……お父さん……私……私……」

今は生き延びたことを素直に喜ぼうと思った芳佳の顔には、一筋の雫がつつたっていた。

翌朝、全世界に向けて一つの声明が発せられた。

ブリタニア近海で発生した日本国艦隊の扶桑皇国艦隊救援を機会とした日本政府（一応便宜上このような物がある。人間は三浦唯一人だが）は、かれらに日扶同盟を締結するとし、ネウロイとの戦争において、完全に同盟を履行する意志があることを宣言したのだった。

扶桑政府もその声明に対し極めて友好的な態度をとった。

一部では、なぜ今更かの国が参戦してくるのだという疑問の声も上がったが、扶桑の政府はそれを黙殺した。

なぜなら、日本国政府は扶桑皇国に対し、新型駆逐艦（とはいってもこの時代にあつたものだ、もちろん）24隻と大型装甲空母4隻の貸与を約束したからだ。

ただし、日本国政府による声明は戦争地帯を当面は大西洋方面に限定する、とものべていた。

.....

.....

...

第二話（後書き）

七月二十日、登場人物のところに追記しました。

第三話

SIDE：《リライアント》会議室

傷ついた空母《赤城》が曳航されてブリタニアの軍港に入ると、芳佳と坂本は行く所があるというので《リライアント》から下船し、ウィッチたちは基地へ帰還するというのでこちらも坂本たちと同様に艦を降りた。

そしてそれとは別に三浦も《赤城》艦長、及び第501統合戦闘航空団隊長、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐を《リライアント》艦内の会議室に呼び寄せた。

そしてその要請から三十分後、《リライアント》の会議室には呼び出された二人、及びその二人を呼び出した張本人である三浦が居た。

三浦が最初に言葉を発した。

「まずは扶桑皇国遣欧艦隊旗艦《赤城》艦長、杉田大佐。救援が遅れてしまって申し訳ない。我が艦隊がもう少し早くに到着していれば被害を抑えられたかもしれないというのに」

「いえ、あのまま日本の艦隊が来てくれなかったら全艦が沈没していたかもしれませんから、むしろ感謝しております」

三浦の謝罪に杉田は気にする必要はありません、とでも言いたげな態度を示し、それに三浦もそうか、と返すだけでそれ以上何か言う事はなかった。

一方、ここに呼び出された理由がよく分かっているミーナ中佐が

三浦に発言の許可を求め、三浦はそれを許可した。

「あの、申し訳ありませんが私にはどうして自分がここに呼ばれたのか、理解ができないのですが」

それは当然の質問だった。なにしろこういうものには普通司令が出るものであつて、一介の隊長ごときが出るものではないからだ。

そのミーナ中佐の質問に対し、三浦は簡単に答えた。

「君の言いたいことはわかるが、こちらとしても君らの所の司令とは連絡が取れなかったのだから仕様がな。それに君は一応ウィッチーズの隊長だからね、言い訳はできるだろう？」

「それは、確かにそうですが……」

「それに議題は何も謝罪だけではないのだ。今後の我が国の方針を君たちに知らせておく必要がある」

ミーナ中佐を遮って三浦は話を続ける。

「君たちの知つての通り、我が日本は国民を人間のみに絞れば、今ここにいる私以外に人類は存在しない。ここまではいいかね？」

「確かにそうですな」

「はい」

三浦は杉田大佐とミーナ中佐の反応を確かめて言葉を続ける。

「しかし、いかに一人とはいえ、私も人類の一員であり、そのため日本国にとつてもネウロイは敵であると、つい先程我が国の政府は結論に達した」

「少し待っていただきたい」

杉田大佐が口を挟む。

「貴方のおっしゃっている事は、その……日本国にとっては一応機密事項に該当することなのではないですか？それをなぜ我々に……」

大佐の上げる疑問の声に、ミーナ中佐も頷く。

三浦は、そんな大事な事をまるで今気がついたかのように答えた。

「ああ。まあ、そうですね。確かに一般に国家と言われているものの指導者が口にするべき事ではありません。ええ、もちろん承知しておりますとも。ですが貴方達には今のうち伝えておこうと思いましてね、こうして御足労願ったわけです」

「……と、いうことは何かあるわけですか？」

大佐の言葉に三浦はそうだ、と返しいったん自分の手元にある水に口をつけてから、更に話を続ける。

「実は、我が国は扶桑との同盟を考えているのです。そしてその時に扶桑の艦隊とは将来的に共同作戦をしたいと考えておりましてなこれがその土産です」

そう言って三浦がテーブルの手元にある何かのスイッチを押すと、三人の目の前に立体映像ホログラムが現れた。

三浦が映し出されている画面上の幾つかのスイッチのようなものを次々と押していき、最終的に現れた画面には、空母と駆逐艦の360°全方位から見れる立体映像が映し出されていた。

「三浦閣下。一体これは？」

「立体映像、まあホログラムというやつですな。この程度の技術ならば既に我が国では汎用技術として扱われておりますよ」

「ではこの空母は？」

ホログラムについて答える三浦に、ミーナ中佐が聞く。

「空母は《飛鶴》級、基準排水量50000トン超の大型装甲空母です。こいつなら例え大型ネウロイに襲撃されたとしてもよほど運が悪くなければ撃沈はされないでしょう。せいぜい小破か中破ですむでしょうな。まあ、まともな護衛がついていた場合、という但し書きはつくがね」

「こちらの駆逐艦の方は？」

「こちらは《弓月》級ですな。こいつはおたくのところ（扶桑皇国ですよ、もちろん）の《秋月》級（つまり対空装備の充実した駆逐艦）の後継と考えてもらって結構。まあ性能は段違いだがね」

「私の聞き間違いでなければ、先程の閣下の物言いではこの素晴らしい新型艦を扶桑との同盟における手土産として譲渡する、という風に聞こえたのですが？」

空母と駆逐艦の簡易な説明を受けた杉田大佐が言った。

その顔は、まるで誕生日に自分の物と分かっている贈り物を親が持っているのを発見したかのようだ。

「その通り。既に本国から扶桑皇国へ我が国の輸送機が使節団を送り出したとの連絡もある。恐らく明日までに交渉は速やかに行われ、我が日本国と扶桑皇国は同盟を締結できるだろう」

S I D E : ミーナ

《リライアント》での会議が終わり、基地への帰り道の途中、会議での最後の方の会話を思い出す。

『はあ、私たちには新兵器の護衛を頼みたい、ですか』

『そうだ。新型の航空兵器の公試に付き合ってもらいたいのだ』

『お言葉ですが、我々もそんなに暇というわけでは……』

『大丈夫だ。君らのところの上司からは既に許可をもらっている』

正直日本の兵器にウィッチが護衛としてつくのはあまり意味がないのではないだろうかと思いつきながら聞き返すが、ミーナに返ってきた返事は間違いなく新兵器の護衛を頼む（正確には公試に付き合ってくれ）という物だった。

あまり面倒な事にならなければいいのだけど……

大体、会議が始まる前に第501統合戦闘航空団の司令とは連絡が

つかなかったと言っていた（ちなみにミーナは三浦が本国政府に命令してブリタニア首相のチャーチルと交渉したことは知らない。交渉において日本側が提供したのは“一時的な”第501統合戦闘航空団への協力だ）ではないか。

そしてそんな事を考えている間にいつの間にかミーナはウィッチーズの基地に着いていた。

「まあ仕方ないわね、気を取り直して頑張るとしましょうか」

そう言っただけなら何かを追い払うように頭を振り、基地内部へと歩を進めた。

……

……

…

SIDE：ウィッチーズ基地

そしてその夜……。

ウィッチーズ基地の兵舎の前に、隊長のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐以下、魔女たちが勢ぞろいしていた。

「え〜」

坂本が、一同に芳佳を紹介する。

「今日付けで、連合軍第501統合戦闘航空団に配属となった、宮藤芳佳だ」

ペリー又は敵意を顕にした顔をしているが、残りのメンバーも、小さく手を振ったり、欠伸をしたり、舌を出したり、視線を逸らしたり、反応はそれぞれだ。

「宮藤芳佳です！よろしくお願いします！」

芳佳はにっこりと笑って、戦友となる魔女たちに挨拶する。

こうして。

扶桑を旅立った新米ウィッチ宮藤芳佳のブリタニアでの戦いの日々が始まった。

……………のだが。

数日後……………。

S I D E：日本国領 仁科港 《リライアント》CDC

大西洋、欧州のすぐ近くにあるブリテン島、そのすぐ横に遊弋する大きさは扶桑皇国の四国ほどの島、その南東部にある軍港に、その巨大な双胴空母の姿はあつた。

あの会談から数日後、三浦は《リライアント》のCDCで、会談でもミーナに言つた新型の航空兵器の設計を行つていた。

「中佐にはああ言つたがな、これは実際航空兵器というよりは衛星軌道兵器というんじゃないのか？」

そう言う三浦の操作しているディスプレイにはどこかのつぺりとした、その全体を銀色の塗装で覆われた航空機の姿があつた。

「うん。衛星軌道への到達は《ソヴィエツキー・ソユーズ》で可能な事が判明しているけど、ロシア人の考えた兵器だからな。確実性を上げるために改良しておこう」

ディスプレイに映っている『特殊航空兵器用核融合エンジン？』と表示されたボタンを押す。

よし、これでこの航宙機の心臓となるエンジンの開発は完了した。あとは兵装の開発だな。折角衛星軌道上から敵を攻撃するための機体があつてもその敵を攻撃するための武器がないのでは話にならな

いからな。

武器は……えくになになに、『近接防御用パルスレーザー』、『反物質ビーム砲・宇宙対応型』、『X線レーザー・宇宙対応型』？チー
トだな……、我が国に世界を取れとでも言うのかあの女神は。

三浦はそんな事を考えながらも次々と出てくるボタンをカーソルでクリックして選択してゆく。

ちなみに通常の航空機や艦船、そして陸上戦力などは前世の日本で得ていた知識のものをそのまま採用している。

なのでこの日本で陸軍といえば、もといた世界での合衆国陸軍と同じレベルの装備を持った軍隊（数こそ、陸空軍に限って言えば元の20倍とぶつ飛んでいるが）であり、空軍といえば合衆国空軍、海軍は三浦直卒の艦隊（《リライアント》を旗艦とした艦隊）以外は現実世界に存在していた合衆国海軍だ。

もちろん全ての航空機、艦船、車両には電磁防壁を張っており、防御重力場こそ付けてはいないが対ネウロイでも充分に活躍してくれると思われる陣容だった。

そしてそれらの部隊を構成しているのが人間ではないという点も素晴らしい。

幾らネウロイがこちらの戦力を破壊しても、こちらは人間で構成されている訳ではないので人的被害は一切ない。

彼らはどれほど破壊されようとも日本本土が無事である限り無限に生産することが出来る。

そして彼らは女神の行った洗脳　プログラムにより俺に対しては絶対に従うようになってる。

しかし彼らは日常においては正直、本物の人間と変わらないほどであり、俺も最初に見た時はかなり驚いたものだ。

しかし彼らは俺が命令で“死ね”と言えば死ぬ。正しく死をも恐れぬ神の軍勢だ。

俺にとつては彼らのそんなところが頼もしくもあり、同時に恐ろしくも感じられる。

そんな事を考えながら三浦は航宙機を完成させ、今度は自らの率いる艦隊を編成する作業にかかる。

流石に全艦をオリジナル艦船とすることは無理があるので、前の世界にあつたアメリカのミサイル駆逐艦群から何隻か引き抜いて、計十隻ほどの任務群を編成することにした。

そのついでに、《リライアント》のカタパルトを電磁カタパルトに換え、艦橋にフェイスド・アレイ・レーダーを取り付け、《ウースター》級の三隻にもフェイスド・アレイ・レーダーとイージスシステムを取り付ける。

これで、少なくとも自らの率いている艦隊　いつまでもただ艦隊、というのでは味気なさ過ぎるので赤衛艦隊にした　の防空能力は、一応は安定して発揮できるようになった。

そして先程開発した航宙機だが、あれはいわば戦略兵器。本当の切り札であり、そうそう簡単には使用したくない。

まあ、今度ネウロイの襲撃があつた時には御披露目として、第501統合戦闘航空団と共に出張らせるつもりだが。

⋮
⋮
⋮

第三話（後書き）

通常の艦船については更新しません。あくまでオリジナルのものを更新しております。

第四話

三浦が新型航空機アークバードを建造してから暫く経ち、日々を赤衛艦隊の練度向上の為にひたすらブリタニア近海で艦隊演習（例えばAIがあるといても三浦本人の方は演習でもやらなければ練度的に問題がある）をしていたら、三浦はなぜかは知らないがウィッチーズの開く親睦会に招待されていた。

ウィッチーズ基地。

「ふむ、しかしいいのかね？私のような者がいても？現にほら、宮藤軍曹などかなりカチコチになってる気がするんだがね？」

「はうっ！そっ、そんなことないですっ！」

三浦に指摘された芳佳が周りから見てもどう見ても緊張で強張っているというのに必死になって否定する。

「いえ、それが……親睦会を開くとなった時に、協力部隊である赤衛艦隊の司令（つまり閣下です）にも一緒に参加してもらったら、と宮藤軍曹が」

「ああ、宮藤軍曹が。それなら仕方ないですな」

ミーナが芳佳の名前を出してそれなら仕方がない、と頷く三浦に周りのウィッチーズも失笑している。

「まあ、一応艦隊の方は沖合いに遊ばせておけば問題ないだろうね」

「ええ、もちろん。ありがとうございます、閣下」

一応、ネウロイが来た時に艦隊が停泊しているだけでした、では話にならないので赤衛艦隊を沖合いに遊弋させていることを告げる。

ミーナもそのことは考えていたらしく礼を言う。

「で、私は中佐と行動を共にすればよいのかな？」

三浦が確認を取る。

「はい。ですが閣下は今回客人、という立場になりますので、村に到着した後の行動は基本的には制限されません」

……

……

…

ということまで三浦はウィッチーズの皆と共に村への親睦会に来たのだが……。

「第501統合戦闘航空団、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐です」

出迎えた村の人々の前にずっと出て、ミーナが敬礼する。

流石にあの歳で隊長を勤めているだけあって堂々としたものだと、

三浦は素直に感心する。

「国防市民軍指導要員、ロンドン第一歩兵師団のリチャード・ガレットJr」。少尉です」

村民の中から、数名の男たちが歩み出る。

もつとも若い、軍服をまとった二十代半ばの男がまず、ミーナに敬礼を返す。

国民市民軍とはネウロイの侵攻に対する局地的な防衛戦力として退役軍人、兵役免除者などが参加する組織、ということらしい。

そしてガレット少尉のあとに退役軍人である老人の自己紹介が終わり、続いて。

「トリビューン紙のオーウェルです。今回の親睦会の取材をさせていただきます。ところで……そちらの方はもしかやとは思いますが三浦大元帥閣下ですか？」

そう言っただけ表面上はにこやかに、ぼそりと呟きながらミーナに手を差し出しているのは、トレンチコートにソフト帽という都会的なスタイルの中年男性。

記者は一応、ミーナ中佐に手を差し出しているが、その目は三浦の方に向いている。

「お手柔らかに、記者さん」

ミーナもにっこりと手を差し出し、互いに握手はしているが、やは

り記者の目は三浦の方、それも階級章である六芒星のある肩の部分に向けられている。

六芒星は日本では大元帥を指し、それは一応国外にも知られている。何故かといえは階級が必要な時に、他国に知られている階級を持たないのではまったく意味がなくなるからだ（日本国内では、例えば階級がなくても三浦がトップなのは公然の事実である）。

「早耳ですね？……親睦会の話はどこから？」

そんな記者の視線を無視して、話を続けようとミーナ中佐は尋ねる。

「そりゃ守秘義務ってヤツがありました」

ここでようやくミーナ中佐の方に視線を向けた記者が答える。

「ジョージとお呼びください、レディ」

「では、私のことはミーナと」

ミーナはそう返しながらも、記者に対しての警戒を強めた。

マスメディアの中には、常に軍批判を狙っている輩がいる、これはまだいい。

だが、今回は日本国トップである三浦が来ているのだ、当然記者は三浦にも質問を投げかけるかもしれない。

そして、三浦は世界各国が救援を求めた時に（女神の適当な歴史改竄の所為でこうなった、もちろん）それに対しまったく反応を寄せなかつた国の元首という事でもあるのだ、当然、記者は槍玉にあげるだろう。

それは、この間締結された日扶同盟、そして現在の赤衛艦隊が第501統合戦闘航空団に支援艦隊として存在している、という関係に罅を入れかねない。

別にミーナ自身は扶桑皇国の人間でもないし、正直日本に対して少し個人的に思うところもある。だがこの同盟が破棄された場合、日本は当然の事ながら連合軍から外れ、一国で全世界を相手にできる軍隊でもって世界中のネウロイを叩き潰しにかかるはずだ。

だがその場合、人類の勝利ではあるが連合軍の勝利ではない。

それに人類の勝利かも正直怪しい、なぜなら日本で人間は三浦唯一人で、あとは全て機械だからだ。

これでは人類の勝利ではなく、ロボットの勝利になってしまう。

そしておそらく、日本が全力でネウロイを叩き潰した時、そこにミーナたちの帰るべき祖国は無くなっているだろう。

いや、今現在残っている北部の一部くらいは残るかもしれないが、それだけだ。

ネウロイから奪い返した土地を人類に返還する義務は、日本にはない。

いや、国際的にいえばあるのかもしれないが、日本がそれを呑まなかった場合どこの国も日本に対して文句を言うことは出来ない。

単純に物量と、そして兵装のレベルが違いすぎて戦争をやった場合絶対に勝てないからだ。

そしてこの記者がそのことを把握しているかどうかも怪しい。

だからこそミーナは、この記者に対する警戒を強めたのだ。

「カメラマンもあなたが？」

オーウエルの肩からストラップで提げられたカメラを見て、ミーナは尋ねた。

「記者もカメラマンも手が足りませんでね。あなたの故郷カールスラントにも、我が社から何名か特派員が飛んでいますよ」
「危険を顧みずに、ご立派ですわ」

………

………

…

S I D E : 三浦

その後、記者のミーナへの質問（取材）が空気を読んで中止させたガレット少尉の手で終わってから、記者は次に俺の方に来て色々質問を投げかけてきた。

内容はどれも『なぜ各国の再三にわたる救援要請を無視し続けているのか』、『どうして今頃になって扶桑皇国との同盟締結に踏みきったのか』、『今後、他の国とも同盟を結ぶ可能性は？』など e t c . だ。

正直、この世界での各国の日本に対する心情は余り良くない。

特にネウロイに侵略されて国土を失った、もしくは失いかけた国々（ガリア、カールスラント、オラーシャなどの欧州の国家や、アフリカ大陸の国々）はその傾向が著しく、理由はといえば、その優れた科学技術と軍隊を頼りに救援要請を行った（事になっている）のに対し、日本は一切回答を行わなかった、となっていたのだ。

だがそのようなことを言われても俺はまだこの世界に来て数週間しか経過しておらず、そんな捏造された歴史の流れで自分に罪があるなどと言われても正直償う気にもならない。

なので無視し続けていた事と、今更の戦争参加に対しては、

『本国政府では、「人間とネウロイの戦争に我々機械は関係ない、この戦争で忠良なる我が国民の血が、人間のために流される事に何の意味があるでしょうか？いや、意味などありません。人類とネウロイが互いに好んで血を流していたいのならば　よろしい、勝手に彼らのゲームをプレイして貰えば良いのです……」と当時の政府幕僚が言っていたのを何とか開戦に持ち込むために説得していたのだ』

という嘘八百もいいところの言い訳をし、同盟の話題については、

『そうですね、チャールズ首相閣下とは長い付き合いをしたいものですな。ええ。必要があるならば他の国とも同盟を結ぶ可能性も無きにしも非ずですが、この先は機密（当然嘘）に該当するので申し上げられませんな。いや、ははは、申し訳ない。ええ』

というこれまた出鱈目かつ適当な返事を返して記者を追い払った後、俺は宮藤軍曹がやっているという屋台にやってきていた。

「どうも、軍曹」

俺が宮藤軍曹に声をかけると、軍曹は一瞬驚いたような表情をした後、俺にお好み焼きを勧めてきた。

「ありがたく貰うとしよう」

そう言っただけ俺は軍曹の作ったお好み焼きを受け取り、その正直なせこんな所で戦いに身を投じているのか分からなくなるような少女の作った味の良いお好み焼きを味わっている時、現在ガリア方面上空を飛行中の《リライアント》の偵察機、E-2 ホークアイから緊急連絡が来た。

報告の内容は、ネウロイの、ガリアからの大規模侵攻部隊発見の報告だった……。

……

……

…

SIDE：ガリア沿岸上空、高度約400km 《アーク・バード

》機内

同じ頃、日本国西部の端にある嘉手納航空機用基地から発進し、間もなく衛星軌道上に音速の二十倍以上の速度で突進しながら到達しようとする《アーク・バード》は、《リライアント》から哨戒任務

を割り振られている部隊　　シルバー・ホークス隊の内の一機（コールサインはタツフィー06）から送られてくる情報を受信した所だった。

「おい、ネウロイが侵攻の気配を見せているってのは確かなんだな？」

周りが電子機器で埋め尽くされた薄暗い機内。そのあえて弱い照明しかつけられていない機内では、四人の乗組員がそれぞれの業務を忙しそうにおこなっていた。

その機長　　山崎輝彦大佐の問いに、通信担当である佐藤大尉が答える。

「ええ、間違いありません。タツフィーから送られて来た情報によればネウロイの構成は大型ネウロイ八十以上、小型ネウロイ百五十以上からなる大規模侵攻部隊のようでした、進路はこのままいけばブリテン島に上陸、首都ロンドンに向かうと思われれます」

「了解。既に赤色警報レッド・アラートは出されているな？」

山崎の確認に佐藤は、はいと返して報告を続ける。

「既に《リライアント》はネウロイに対して攻撃隊を発艦させたようです。三浦大元帥も許可を出した出撃ですから、もうしばらくすれば我々にも攻撃命令が出るでしょう」

その報告に山崎はそうか、と返して思考する。

今、俺の乗っている《アーク・バード》が飛んでいるのは衛星軌道上であり、ここまでではどんな敵性勢力の兵器も到達せず、同時にこ

こちらは好きな位置、まあ流石に巢の上空には行けないが、から大気圏内の目標を攻撃出来るだけの兵装を搭載している。

だが例え《アーク・バード》が現状で最も強力な対地攻撃可能な戦力でも、大元帥からの指示がなければこの機体は攻撃をすることは出来ない。

理由としては、この機体は今現在、日本の最終兵器と言えるからだ。

それに先程その大元帥にネウロイの情報をタツファイー06が報告した所、赤衛艦隊は全力出撃を命じられ、ドーバー海峡に急行したという。

そう、確かに赤衛艦隊の航空戦力は強力だ、恐らくは襲来するネウロイの半分ほどなら、独力で排除可能だろう。

だが。

山崎はさらに思考する。

例えその半分以上を排除されたとしても、ネウロイは今までのウィッチによる迎撃効率を超えるほどの数で襲来している。

そんな時のために開発、建造されたのがこの《アーク・バード》だ。それなのに、こんな時にただこの蒼い星と闇の海の境界線上から戦況を眺めている事しか出来ないなんて、と思いながら山崎は溜息をつく。

だが山崎がそう考えている間にも、三浦の手によるこの巨人機は、機体後部に設置された二十四基のマス・イオン・ドライブ推進システムを正常稼働させながら衛星軌道上を飛行し続けている。

しばらくして。

折角の攻撃のチャンスなのに攻撃命令が出ないためにくさっていた山崎に、三浦からの命令が届いた。

命令は山崎が望んだ内容とほぼ同一で、命令文には短くこう記してあった。

“ 発：三浦明大元帥
アーク・バード
宛：日本国航空機

《アーク・バード》はこれよりブリテン島近海で行われている戦闘に加入し、敵性勢力を殲滅せしめよ”

そう、遂に彼らの鎖は解き放たれたのだ。

……

……

…

第五話

ミーナ中佐以下、ストライクウィッチーズのメンバーは、軍用トラックの周りに集まっていた。

さらにその周りを、村民やガレット少尉、オーウェル記者が取り囲む。

当然、そこには三浦の姿もある。

「か、監視所から報告！巨大ネウロイ五十機以上と小型ネウロイ約百機からなる編隊が接近中……だったんですが……」

基地に入った連絡を、トラックの無線で受けた整備兵がミーナに伝える。

「要点を簡潔に報告しろ！」

詰め寄る坂本。

「な、南東70kmの海上で二つに隊を分け、巨大ネウロイ、及び小型ネウロイの半分以上がロンドン方面へ」

不安そうに村民が見つめる中、整備兵は声をひそめた。

「……残りの巨大ネウロイ、及び小型ネウロイの約二割ほどが、真っ直ぐこちらに向かっています」

「今までネウロイが一度にこれ程現れる事はなかったわ……ネウロイはこことロンドンを焼き尽くすつもりかしら」

と、ミーナ。

「何？……っ！？申し訳ありません！中佐、まだ続きがあります！
！」

だがどうやら整備兵の報告にはまだ続きがあつたらしく、ミーナに報告した。

「先程発見されたネウロイですが、どうやら所属不明の友軍機が既に戦闘を開始しているようです」

「所属不明の友軍機……？どうということだ？」

坂本が眉を顰める。

「はっ、それが……友軍機は見た事も無い機体で、速度が恐ろしく速いために国籍が確認できない、だそうです」

「ああ、それは恐らくは我が国の航空隊でしょう」

と、そこで今まで黙っていた三浦が唐突に口を挟む。

「どういう事ですか？閣下の国の航空隊？」

ミーナはそう訝しむような声を上げ、同時に周りからも三浦に視線が向けられる。

「ええ、先程赤衛艦隊の哨戒機からガリア近海を遊弋中の全軍に赤色警報が発令されましたな。報告を受けた赤衛艦隊、及び付近に展開していた一個任務群が迎撃に向かいました。まあ、排除しきれなかったようですが」

「どうして報せてくれなかったんですかっ！？」

三浦のその言葉を聞いた途端、芳佳が詰めより、周りの村民達からも非難の野次が飛ぶ。

「何故かといえば、我が国はブリタニアとは同盟を結んでおらず、更に言えば支援艦隊とはいえ、赤衛艦隊は命令系統が別だ。それに一応迎撃艦隊は派遣しているし、次の手も打ってある」

「次の手、というのは？」

坂本が聞くが、三浦はそれにこう答えて、不敵な笑みを浮かばせるだけだった。

「それは現地で見るといい、今日のロンドン上空は珍しく雲が少ない、運が良ければ見えるはずだ。いいかね？空に注意しておきたまえ」

………

………

…

同時刻、ロンドン・シティ区

「いや、申し訳ないね、私の用事に付き合っただけにこのような事態に巻き込んでしまった」

「はは、まあよいではないですか」

そうチャーチルは日本がブリタニアに送った全権大使、真岡吉蔵に言うが真岡の顔には不安は全くなく、寧ろ楽しげだ。

その態度について首相秘書官は一体、日本のこの限りなく人間に近い作りの機械仕掛けの全権大使はどういう思考回路をしているんだ、と思ったが口には出さなかった。

「しかし、いやはや日本は随分と手際が良いようだね？聞いたところによると我々がネウロイを発見した時にはもう戦闘に入っていたらしいじゃないか」

「ああ、それは」

真岡はチャーチルの言葉に鼻を掻きながら、まあ哨戒機がガリア沿岸を飛んでましたからね、と返す。

「ですが貴方方の航空隊　確か、ストライクウィッチーズとかいいましたかな？彼女らも既に出撃したと聞いたのですが？」

「ええ、どうやらそのようですね。ですが今回襲撃してきたネウロイは数が今までにない規模ですからな、いくら貴方方の国の兵器が優秀で、ウィッチ達がいるとしても、運悪く突破される事もあるやもしれませんぞ？その場合大使殿の身の安全は保証できかねるのだが、避難せずによいのですかな？」

そんなチャーチルの言葉に真岡は本当に愉快そうに笑う。

その反応にチャーチルの顔には機械に馬鹿にされたというような、やや不快そうな顔だ。

正直、チャーチルは今日の前にいるこの日本人があまり好きではなかった。今日こうして被災地の視察に誘ったのも、社交辞令のようなものだ。まあ社交辞令で被災地視察に付き合わせるというのものと

うかと思うが、チャーチルは相手は所詮ロボットだ、と気にしていなかった。

「私がおかしな事を言ったかね？」

「いえいえ、これは失礼を、閣下」

真岡の様子に周りにいる秘書官達も眉を顰める。

「ただし申し上げるならば、貴国は我が国の戦力を甘く見過ぎですな。たまには空でも見上げてみたらどうですか？ひよっとしたら、地表付近まで降りてくる流星があるかもしれません」

「という事は、まだなにかある、という事ですか？」

真岡は大きな笑い声をあげていた。

「さあ？どうでしょうな。もしかしたら何もないかもしれませんが？」

「実はつい最近、地表から宇宙へ向けて流星が飛び立ったと聞いた」

何が面白いのだという表情でチャーチルは言った。

だが、彼のブリタニア的自制もそこが限界だった。

彼は、先程まで内心相手の事をたかが機械だ、と思っていた自らの考えを改め、目の前の機械仕掛けの全権大使と声をあわせるようにして笑い始めた。

近くにいた首相秘書官を含む人々は仰天していた。

辛うじて騒ぎ出さずに冷静を装う事は出来たが、彼らの内心はその正反対だった。

彼らにはまったく理解できなかった。

つい先程まで、彼らの首相はあの機械仕掛けの日本人に大して友好的ではなかったのだ、なのになんでまた、まるで旧知の友のように笑いあっているのだ？

彼らには理解できなかったが、真岡と話をしていたチャーチルは理解した。

彼は今の今まで、日本人達が本気で戦争をやる気がないと思っていた。

だが、彼らは恐らく本気でネウロイとの戦争を行うつもりなのだろう。

だからこそ、彼らの国の機密に関わるような存在の兵器を匂わせるような発言をしたのだ。

かくして、チャーチルはこの大して長くもない会話の中から日本人達の真意の一片に触れ、このあと急速にこの機械仕掛けの全権大使と親交を深めていくことになる。

そして同時にそれは近い将来、日扶英の三ヶ国による同盟が締結される事も意味していた。

「ブリテン島沖合い100km地点海上」

ここで話が少々変わる事を断っておくが、日本に軍を建設するにあたって三浦は軍にロボットを配属する事にしていった。

いや、最初は陸兵のみに導入するつもりだったのだが、途中で海軍と空軍にも導入する事にしたのだ。

理由としては、いざという時のダメコン要員と、まったくの無人で構成されている軍隊というのは好ましくないという観点からだった。まあどちらにせよロボットで構成されているため無人という事は変わらないかもしれないが。

そしてそれは赤衛艦隊も例外ではない。赤衛艦隊の旗艦、《リライアント》には約三千名の乗員が乗っている。

「ラインベースよりフアング・リード、緊急事態。作戦海域アントンにて展開中のアーガス01（ドーバー海峡に展開した第10空母打撃群、旗艦はニミッツ級原子力空母、《ロナルド・レーガン》）に対して敵接近中。貴編隊はターナー・ポイント方面より接近中の敵をドーバー海峡上にて迎撃せよ。詳細情報は直ちにタツファイヤー転送する。コールサインはタツファイヤー02。交戦規定、ガンズフリー。送レ」

「フアング・リード了解。迎撃行動に移る」

面倒な事だ、《リライアント》に乗り込んでいる三千名余りの乗員の内、戦闘機パイロットとして乗り込んでいる者の一人である佐伯孝義大尉はそう思った。

なにしろ母艦であるラインベースから先程発艦した第二次攻撃隊とは別の、定期CAPのために飛び上がって早期警戒機の管制下に入っていない時に送られてきた戦闘海域には今現在、第10空母打撃群以外には味方艦隊は居らず、その肝心の任務群は巨大ネウロイが内部に格納していた小型のネウロイ　一機につき十機ほどを内部に格納している為、大型小型合わせると最初に掴んだ敵総数の約数倍、およそ四百機を超えるネウロイの襲撃を受けつつあるという事になる。

しかもそのネウロイは最初のととは別の奴らしく、どこから現れたのかといえば最初に発見されたネウロイの大規模侵攻部隊に《リライアント》と《レーガン》から発艦した第一次攻撃隊が攻撃を仕掛けてその数をやつと半数ほどに減らした時に、大規模侵攻部隊の出現地点と同じ場所から現れたのだと、先程まで哨戒任務についていたタツファイー06に代わりタツファイー02が報せてくれた。

その時《レーガン》は第二次攻撃隊の発艦準備中の為にガリア沿岸方面に向けて進まねばならなかったため、ネウロイとの距離は既に60kmしかないそうだ。

まあ別段大した事ではない。彼はそう思った。

愛機である彼のYF23-ブラックウイドウ？は搭載されたGE製YF120エンジンを豪快に唸らせながらこの時代の航空機ではありえない速度で快調に飛翔し続けているし、この機体には性能の良い電磁防壁が搭載されているから、よつぼどの集中砲火を浴びなければ生きて（という言い方は変かもしれないが）帰る事ができる。

それに、今日はスパローの最新型、AIM-7M/Pを最大本数

つまり六発搭載している。こいつならネウロイの野郎が攻撃を仕掛けてくる遙か手前から先制攻撃が可能だ。まあ大型には余り効かないだろうが、小型ならこれで充分だ。

佐伯はレーダーを作動させると後続の三機にバンクしてみせ、スロツトルをアフターバーナーへ押し込んだ。

……

……

…

それからしばらくして、戦闘海域に全速で飛行しながら、ホークアイ　　タツファイー02との情報のやりとりが終わると、迎撃可能エリアに入ったと伝えられた。

佐伯は了解、と答え、レーダーを補足モードに切り替えてディスプレイを覗き込み、管制機から伝えられる攻撃すべき目標をロックしていった。

一機あたり六個の目標を同時にロックできる佐伯の編隊が最終的に放つのは、二十四個の目標に対して二十四発のミサイルだ。一発につき一機、という事になる。

ディスプレイにロックオン・シンボルが出た事を確認した。大量の小さい目標の中に幾つかでかい反応があり、その中の小さい目標にだけロックオン・シンボルはついている。

そしてそれを見て恐らくは小さいのは母艦ネウロイから出てきた奴
だろうな、という彼の判断をホークアイから伝えられてくる情報も
肯定している。

佐伯はロツテを組んでいる後続の三機に伝えた。

「発射開始」

機体に軽い衝撃が走り、合計して一トン超の重量が機体から離れた。
佐伯の命令を受けて後続の三機も次々にミサイルを発射する。

各機体から解き放たれた合計二十四本の細長い物体は直ちに尾部に
取り付けられているハーキュリーズ Mk. 58 デュアル推進固
体燃料ロケットモーターを点火させ、しばらく名残惜しそうに飛ん
でいたが、やがて推進システムによる猛烈な加速で機体の速度を抜
き去って遙かな前方に向けて飛行していった。

……

……

…

結局、佐伯の率いていた編隊が放った二十四発のミサイルは、小型
ネウロイに対してはその全弾が命中した。

まあ、それでも現状では焼け石に水でしかなかったのだけれども。

⋮
⋮
⋮

第五話（後書き）

20100803 / 一部改編しました

第六話（前書き）

たいへん遅くなりました、誠に申し訳ない。

そしてどうやらこの作品の更新速度は一ヶ月ちよつとに一度という頻度になりそうです。すみません。

第六話

く《ロナルド・レーガン》 ドーバー海峡く

この日、《レーガン》は九隻の護衛艦を引き連れて第10空母打撃群としてドーバー海峡で襲来してきたネウロイに対し《リライアント》の航空隊と共にロンドンへ侵攻中のネウロイに対し攻撃隊を発艦させていた。

だが、本来ロンドン方面の救援に向かうはずだった第二次攻撃隊は現在、自らの母艦を含む任務群を守るために、ガリア方面より《レーガン》へ向けて襲来してくる四 を超えるネウロイを迎撃する為になんとか飛び立とうとしていたが、どうやら全ての機体の発艦は襲撃以前には完了しそうにもなかった。

「甲板にいる機体は全機発艦させる！上がれる奴らは皆上がらせるんだ！」

何？対艦ミサイルの装着がまだの機体がある？対艦ミサイルなんぞ付けないでいい！大型は船に任せてしまえ！」

電話を切った工藤中佐は飛行甲板を眺めた。

そこでは発艦準備ができた機体から発艦させようと、普段よりもさらに慌しく動き回る誘導員達に指示されてF-35C ライトニング？がカタパルトへと侵入した。

先程とは別の電話が鳴った。艦長だった。

「針路変更？危険です。発艦が不能になります。もしも命中弾を受けたら」

遠方の海上で閃光が煌めいた。火矢が白煙を吐きながら空へ昇って行く。

護衛艦が接近中の敵に対してミサイル迎撃を開始したのだった。ミサイル発射間隔の狭いのがイージス艦だろう。《レーガン》の護衛に付いている二隻のイージス、《アーレイ・バーク》と《ジョン・ポール・ジョーンズ》は垂直発射ランチャー装備艦であり、そのミサイル発射速度は並の中距離防空ミサイル艦より遥かに高い。

「もう一分」

工藤は言った。

「もう一分、このまま走って下さい。それだけあれば、なんとかライトニングだけは全機出せます」

工藤は電話を切った。

内心、もしかしたらどうにかなるかもしれないと思う。

なんといてもネウロイは音速を超えられない。突然の奇襲に俺達は確かに混乱した、だが既に艦隊は持ち直し、ライトニングだけとはいえ、航空隊も発艦の目度があった。

そうだ、これなら。

飛行甲板から響いた轟音に気づいた工藤はそちらへ視線を向けた。まだ対大型用として扱われているハーブーンを装備し終わっていないらしいライトニング？が発艦していた。

その機体は最低限の離陸距離を滑走すると、アフターバーナーを吹

かしてそのまま強引な角度をとって上昇する。

工藤中佐は思った。

危険だ。普段ならこのあと艦に降りたらあのパイロットは嚴重な注意と始末書が待っているだろう、悪くすれば解体処分をくらうかもしれない。

だが今は、ああする事でより早く他の機体が発艦出来るようになる、非常に勇敢な行為として記録しておいてやらなければならない。

《レーガン》の近づいているガリア沿岸の上空にて、《リライアント》の定期CAPがネウロイに対空ミサイルを一斉発射したとの報告が入ったのは、彼がそう考えながら飛行甲板を見ている時だった。

現実には、どうやら彼に味方しているという事らしかった。

同じ頃、教会の敷地内に設けられた、村の防空壕の中。

「エディ〜!」

「マーガレット!」

「トム、どこなの!？」

「誰かうちのアーニーを見ませんでした!？」

避難してベンチに座る村人達を掻き分けるようにして、数名の女性が尋ね回っていた。

顔には焦りと、不安が見える。

「どうしたんですか？」

そんな女性達の只ならぬ様子に気づいて落ち着かせようとしたのだろう、ガレット少尉が女性達に声をかけた。

「う、うちの子供達が!」

「まだ外にいるようなんです! どうしましょう!？」

うろたえながらも、必死の形相で女性達はガレット少尉に訴えた。

「国防市民軍は、子供達の捜索に出る!」

ガレットはその訴えを聞き、振り返って男達に命じる。

「……どれ、あたしも協力しますかねえ」

と、立ち上がるオーウェル記者。

それを横目で見ながら、三浦は情報端末をいじっていた。

表示されているのは、赤衛艦隊を含む日本軍、およびストライクウィッチーズとネウロイの戦闘経過。

「やはり、期待していたほどの戦果は上がらないようだな。小型は戦闘機のミサイルレベルで何とかなるが、大型はやはりハーブーンクラスの破壊力を持った兵器の大量、集中投入でなければ倒せないという事だな」

だがそれでは非効率だ、目の前での記者と国防市民軍とのやり取りを見ながら、三浦はそんな事を呟く。

「大型を倒すのに最も効率の良い方法は、やはり人型兵器、か……」

そしてそう結論付けると、三浦は手に持っている情報端末を操作し、画面を切り替えた。

そこにはロンドンで戦っているストライクウィッチーズ隊を含む英空軍のウィッチの戦闘経過、そして、一体の？神姫？の計画図が…。

……

……

…

「ね、親分はどこ？」

男の子に手を引かれた少女が、キョロキョロと空を見上げながら尋ねていた。

「もうすぐ見えるって」

その子の兄らしい男の子は他の子供達を引き連れて、石垣の側を通り、小麦畑の中の畦道を、村はずれの小高い丘の方へと向かう。

子供の姿は全部で五つ。そんな彼らの少し離れた所には、一機のヘリが飛んでいた。

彼らは皆、ルッキー二達の戦いが見たくて、大人達の目を盗んで防空壕を抜け出してきたのである。

「大丈夫かな、親分。負けてないかなあ？」

そばかすの多い赤毛の男子が小走りですべてについて行きながら、心配そうに呟く。

「つたり前だろ、トム！」

妹を連れていた男子は、トムを振り返ってグイッと親指を突き出した。

「俺たちの親分は、ロマーニャ公国空軍第4航空団所属の空のファンタジスタ！ ガッティーノこと、フランチェスカ・ルッキーニ少

尉なんだぜ!」

~~~~~

「あ、あいつら!」

空中戦の撮影ポイントを探して小麦畑の方に向かっていたオーウェル記者は、見晴らしのいいヒースの丘の方に歩いてゆく子供たちの姿を発見した。

「取っ捕まえて、尻っぺたを叩いてやるか」

呟き、子供達の後を追おうとするオーウェル。

と、その時。

「…ヤバいな」

オーウェルは子供達の方に、三機の小型ネウロイが接近しつつある事に気がついた。

ちょうど木立が目隠しとなって、子供達からはネウロイは見えない。

「おい! ガキども!」

風と銃撃、そして上空を飛行しているヘリの音で、オーウェルの声は子供達まで届かない。

(……待てよ)

オーウエルはふと、考え込む。

(ネウロイに殺された無辜の子供達の悲劇。……なるほど、明日の第一面を飾るに相応しい衝撃的なネタだ)

オーウエルの手がカメラを掴み、レンズを子供達達とネウロイに向ける。

(インパクトは十分！ 子供達が撃たれる瞬間の画が欲しい！)

シャッターにかかる指。もしも今のこのオーウエル記者の姿を見たとしたら、子供達の母親達は怒り狂ったことだろう。

子供を見つけておきながら、しかも近くにネウロイがいることを知っておきながら貴方は何をしていたのか、と。

(どうせ今から助けに走っても、間に合いつこない。それなら、この一枚の写真と記事で全ブリタニア国民の戦意を高揚させ、一日でも早く勝利をもたらした方が、ずっと多くの人の命を守れる筈だ！)

オーウエルは、そうして自分の正当化を計ろうとする。

だが。

(……多くの人を……守る……ため?)

オーウエルの脳裏を、宮藤博士の言葉がふと、過ぎった。

(その力を、多くの人を守るために……)

ファインダー越しに見える子供達の姿。

シャッターの上の指が、鉛のように重く感じられる。

(……それとも、ただ記者としての名声と、人々の賞賛を得るために?)

小型ネウロイが子供達に気がつき、高度を下げ始める。

「……くそつたれ!」

オーウエルの足は、勝手に子供達に向かって駆け出していた。

(止められる悲劇を止めようとするのが、人間だろうか!)

「お前ら、戻れ!」

オーウエルは叫びながら、カメラのストロボを焚いた。

バシユ、と音をたてて、オーウエル愛用のカメラが瞬く。

そのカメラが向けられているのは子供達が撃たれる悲劇ではなく、子供達を救ってくれるかもしれない者達。

(誰か、気がついてくれ! 日本軍でも、ストライクウィッチーズでもいい! 誰か!)



「機長。九時の方向、小麦畑に発光を確認」

「発光？」

そんなオーウエルのカメラが小麦畑で閃光を発したのを捉えたのは、近くを哨戒飛行していたSH-60 シーホークだった。

もしもネウロイが防空壕を襲撃しようとした場合に備えて、赤衛艦隊から派遣された四機のシーホークの内の一機だ。

任務はもしもの時の住民達の救出だが、それとは別にもうひとつ、特別な任務を受けてもいた。

だから赤衛艦隊から派遣された四機のシーホークには、少し特殊な装備が施されている。

「はっ、どうやら記者のようです」

目を望遠状態に切り替え、小麦畑にいるオーウエルの姿を確認したシーホークの操縦士 中岡少尉が答えた。

「記者？ ただ単にウィッチ達の戦闘をカメラに収めてるだけじゃないのか？ ウィッチ達の戦闘は派手だからな。だがまあ、一応何かあるかもしれんから、その周りの確認はしておけ」

「了解」

それに対し、機長である吉村中尉はやや疑いを含んだ声で言ったあと、新たに命じた。

「……機長。どうやら記者の目的は写真を撮る事ではなかったようです。丘の付近の木立にネウロイ、及び防空壕より抜け出したと思

われる子供を確認」

「何だと？ 数は!？」

「ネウロイ、三。児童、五です。ネウロイは既に児童に対し接近中」  
「了解した。おい、徳永少尉！ 付近のウィッチーズに伝える。小麦畑付近の丘にネウロイ、及び児童と思われる人影を確認、我、これより救助行動に移る。シーホーク隊に伝えるのも忘れるな、これより作戦を開始すると伝える」

「了解。ウィッチーズ隊、こちら《リライアント》第八哨戒飛行隊所属シーホーク、コールサインはガンマ・サーチ1だ。小麦畑付近の丘にネウロイ、及び児童と思われる人影を確認、我、これより救助行動に移る」

吉村の命令を受けた若い外見の通信士、徳永少尉が手早くシーホークに備え付けられている通信機を操作し、ウィッチーズと、同じ任務を受けている三機のシーホークにそれぞれ別の通信内容を伝えた。  
「こちらガンマ・サーチ1。サーチ2、3、4は指定の作戦行動に移れ。あまりもたもたするなよ。時間は限られている」

それに対し、ウィッチーズと三機のシーホークからそれぞれの通信が返される。

「機長、ウィッチーズが一人、既にネウロイと交戦しているようです」

「……了解した。そのウィッチには、ネウロイは一機だけ撃破せずに残してくれと伝えてくれ」



(あれ?)

ネウロイを発見したガンマ・サーチ1が付近の友軍に通達する前、小麦畑で閃光を捉えた者がもう一人いた。

「……あの記者さん？」

それはルツキーニだ。

小麦畑を突っ切りながら、記者は怒鳴り、大きく手を振って木立の方を指し示す。

「おい！ ガキどもが！」

ルツキーニは、そちらの方向に目をやった。

「！」

子供達に小型ネウロイが三機、接近している。

(あ、あいつら！)

ルツキーニは魔道エンジンの出力を高め、子供達に向かって飛ぶ。

「あ、親分だ！」

自分達の方に向かって飛んでくるルツキーニに、子供達は気がついた。

「親分！」

「おやぶ〜ん！ 頑張れ〜！」

手を振って応援する子供達に、小型ネウロイ三機が囲むように急接近する。

（これ以上近くであいつが爆発したら！？）

「危ない！」

警告を発しながら、急降下するルツキーニ。

そのルツキーニを、ちょうど背中を向ける形になった巨大ネウロイから発せられたビームが襲う。

ビームは狙い過たず、ルツキーニのストライカーユニットに命中した。

（被弾！？）

身体を捻ると同時に、小型ネウロイを撃つルツキーニ。

「間に合ええええええっ！」

その弾は、子供達を巻き込まないぎりぎりの位置で爆発した、が。

「そんな……っ！」

子供達を取り囲むように接近していた小型ネウロイは三機、ルツキーニが落としたのは、そのうちの二機だけだった。

「あいつらが……っ！」

爆風に煽られたルツキーニは、そのままコントロールを失って木立の枝の間に突っ込んだ。

その間にもネウロイは子供達に接近し、もうすぐビームを放てる位置に着きそうになっている。

そんな時、唐突にルツキーニが耳に装着しているインカムから、日本軍のヘリから通信が届いた。

『こちら、《リライアント》第八哨戒飛行隊所属シーホーク、コールサインはガンマ・サーチ1。ネウロイと交戦中のウィッチ、聞こえるか？』

ルツキーニは突然インカムから響いてきた男の声に戸惑いながら、小枝に引っ掛かって辛うじて体勢を立て直しながら返事を返す。

「聞こえてるよ！ 私は第501統合戦闘航空団所属、ルツキーニ少尉！」

『OK、ルツキーニ少尉。ならよく聞いてくれ。小型ネウロイにはこれ以上攻撃せず、陽動を頼む。そいつらは我々が引き受ける』  
「何で!？」

インカムから聞こえてきた攻撃をするなどの言葉にルツキーニは絶句したが、すぐに聞き返した。

『悪いが教える事はできない。これは我が軍の作戦だ』

「どうしてっ!？ あんた達は私達の支援部隊でしょ!？」

『聞こえなかったか？ これは我が軍独自の作戦行動である。よっ

て内容は外国軍に教える事はできない』

それに対し、ルツキーニはなおも言い募ろうとするが、それはインカムに響いてきた別の声によって遮られた。

『ルツキーニ少尉。先程ロンドンに向かったミーナ隊長より通達があった』

その声は、沖合で赤衛艦隊と共に巨大ネウロイと戦っている坂本少佐の声だった。

『通達内容はガンマ・サーチに協力せよ、と言っている』  
「でも……あいつらがっ！」

ルツキーニが子供達の方を見ると、小型ネウロイとの距離はもう三メートルもない。

さつきルツキーニが倒したネウロイと子供達の距離は一メートルほどだったから、あと二メートルほどでネウロイの爆発が子供達を巻き込む距離になってしまっし、なによりもう既にいつ小型ネウロイが子供達に攻撃を仕掛けてもおかしくない距離だ。

『何だと……？ 誰か人がいるのか！？』

人がいると聞き、坂本は聞き返す。

「うん！ 村の悪ガキどもがいるんだけど、私のストライカーユニットがイカレちゃって……」

ルツキーニのストライカーユニットは被弾した箇所が悪かったのか、

黒煙を噴き出している。

どうやら、全開時の半分ほどの速力が出せればいいレベルまで損傷してしまったらしい。

『……わかった。今そちらに向かっていている日本の部隊には子供達を助けてもらえるよう、私が伝える。ルッキー二少尉はその部隊と合力して行動にあたれ』  
「……了解っ！」

そう坂本に返し通信を切って子供達の方に目を戻すと、子供達もようやく自分達の周りにネウロイがいる事に気付き、ルッキー二のそばに走って来ていた。

ルッキー二は高度を地表すれすれまで落とすと、腰に手を当てて子供達をにらんだ。

「こらっ！ 悪ガキども！ 危ないでしょうが！」  
「お、親分！ ネウロイが！」

その子供達の後ろからは小型ネウロイと、ようやく駆け付けた四機のシーホークの姿が。

「なに…あれ？」

生まれて初めてへりを見たルッキー二は思わずそう漏らしてしまう。

と。

その四機のシーホークのうちの二機が、機体下部に据え付けられて

いる砲塔のような物を回転させ、子供達を追いかける小型ネウロイにそれぞれ照準を合わせた。

ネウロイと子供達の距離は、一メートルほど。

「まさか、あの距離で撃つ気！？ あんな距離で撃つたらあいつらまで！」

だが当然そんな事を知らないルツキー二は子供達が爆風に巻き込まれると考え、インカムでへりに通信をいれる。

「ちよつと！ 今すぐ撃つのを止めて！ その距離で撃つたらあいつらまで巻き込まれるんだよ！？」

それに返ってきた返事は無情なものだった。

『作戦停止命令は受けていない。これよりガンマ・サーチ全機は作戦行動に入る。陽動は必要無かったようだが：協力、感謝する』

その言葉と共に、二機のネウロイに向かってそれぞれ一本ずつ光芒が伸びた。

それが、狙い過たずネウロイに直撃する。

「っ！」

それを見たルツキー二は反射的に目を閉じるが、いつまで経っても爆発はない。

恐る恐る目を開けてみると、そこには相変わらず二機のネウロイが

いた。

「そんな、ビームが効かない!?!」

だが。

二機のネウロイは全くこちらに攻撃を仕掛ける様子もなく、それどころか今度は四機のヘリが囲む中央で大人しく編隊を組み始めた。

『こちら、ガンマ・サーチ1。作戦目標達成。これよりサーチ隊全機は《リライアント》に帰投する。ウィッチーズ、重ねて協力感謝申し上げます』

そのまま、四機のヘリと二機のネウロイは海上へと飛び去ってしまった。

「どういう、事……?」

それをルッキーニは呆然と見送った。

「ほ、ほら! さっさと防空壕に入んなさい! エディ、小さい子たちは、あんたが守んのよ!」

だがいつまでもそうしている訳にもいかず、子供達に防空壕へ入るように促す。

そこに、息を切らせたオーウェルが駆け寄ってくる。

「ぶ、無事か!?!」

「と、ぜん!……てまあ、日本の飛行機?が助けてくれたんだけど

ね。でもこの連中のこと、教えてくれてありがとね！ 記者さんのお陰で、助かったよ」

魔道エンジンが嫌な音を立てているのを誤魔化しながら、ルッキーニはオーウエルに言った。

「でも、死んじゃったら痛いから、記者さんも防空壕に隠れててね！」

「あ、ああ……」

まともにルッキーニの瞳を見られないオーウエル。

「親分、あいつ、やっつけてくれるよね？」

ネウロイが消えた事で落ち着いたのだろう、エディが巨大ネウロイを指差して尋ねた。

「村、守ってくれる？」

と、妹のマーガレット。

「決まってるでしょ！」

ルッキーニは、チャーチル流のヴィクトリー・サインを見せる。

「……あいつらを落とすのは、このフランチェスカ・ルッキーニよ！」

ルッキーニは子供達に微笑みかけると、上空にいる三機の巨大ネウロイめがけて上昇していった。

空中では、ウィッチーズが一機の巨大ネウロイを。

残りの大型は、赤衛艦隊の護衛艦がレールガンを乱射して、回復の暇さえないほどにボロボロにされている。

そして、大多数の小型ネウロイは《リライアント》から発艦した防空隊が引き受けている。

少なくとも、今この場においては人類の勝利は決まったようなものだった。

……

……

…

第七話 11/06 加筆

《ロナルド・レーガン》 ドーバー海峡

突如として現れたネウロイに照準したイージス艦が放ったスタンダード、およびハーブーン2は、艦隊に迫りつつあった大小のネウロイのうち大型を一三機、小型を一三機撃破した。ガリア沿岸に現れたネウロイは大型が四機、それから排出された小型が四機であったから、残りは大型二七機、小型が二九七機という事になる。

その生き残りのネウロイのうち、さらに大小合計で四機が《レーガン》から発艦した《F-35》の攻撃隊の放ったミサイルにより撃破された。残りは二五七機。それを二三三機に減少させたのは孝義の編隊が放ったスパローだった。

艦隊の放ったスタンダードの第二波は、それから数秒後の時点で目標との会合点に達した。艦隊の残存ミサイル もちろん航空機用の物、近接防衛用のシースパローは除く 全て、つまり二発を超えるミサイルは、そのうちの半数以上を様々な理由から失っていたが、残る約半数 八八発のミサイルはさらにネウロイを自らと同じ数だけ吹き飛ばした。この時、《レーガン》とネウロイの距離はすでに一五キロを切っていた。一五キロという距離は、新たに放つスタンダードで迎撃出来るような距離ではなかった。

艦隊はスタンダードの第二波が命中した段階で、戦闘態勢を近接防衛へと切り替えた。全速を出している各艦は可能な限りの速度で転舵を行い、ネウロイの来襲方向に対して最も被弾面積の小さくなるような方位をとる。同時に、来襲方向を艦上の各所に搭載されている近接防衛兵器の射界に収めようともしていた。

だが、各艦の艦長がネウロイの来襲方向に対して自分の艦を理想的な場所へ占位させるよりも先に、一四五機のネウロイは第10空母打撃群に対しレーザーによる弾幕射撃を開始した。

~~~~~

ウィッチーズ別動隊 テムズ川

「何ですって！」

ロンドンの司令部からの連絡を受けたミーナは息を呑んでいた。

「チャーチル首相が被災地視察のためにロンドンのシティ地区に！？」

「ネウロイの進行速度と進路を考えると、ちょうど首相の上空が戦場となります！」

無線の声も緊張している。

「どうして退避させないの！？ 敵の規模がどれ程か、判っているでしょう！？」

「そ、それが……」

~~~~~

ロンドン シティ地区

「首相、お願いです！ お車に！ 安全な地域まで急いで避難を！」  
地上では、秘書官がチャーチル首相を移動させようと、必死の説得に努めていた。

「まだ、市民の避難が終わっておらんよ。それに」

チャーチルはそう言いながら、傍らで必死の形相で説得している秘書官を面白そうに眺めている真岡全権大使を指した。どうやら、彼はこの状況に至って、欠片も恐怖や焦りというものを抱いていないらしかった。

「近い将来の同盟国の大使がここまで堂々とするのに、君達は私にだけ逃げると言うのか？ それは我が国が日本のみならず、扶桑を初めとする他の同盟国からの信頼さえ失うという事が君には分らんのかね？」

チャーチルはおっとりとして、諭すように秘書官へ語りかけるが、秘書官はそれでは納得しなかった。

「ですが、首相と大使殿では……」

そもそも人間と機械という違いがあるではないですか、と言いかけて秘書官は口をつぐんだ。それは人間であるチャーチルの代わりを据えるのは簡単にはいかないが、機械である真岡には代わりを簡単に作ったり出来るだろうという事であり、それは事実でもあったが、本人を前にした発言としてはあまりにも礼を失した発言だったから

だ。最悪、国際問題　いや、日本の場合ネウロイを片付けた後、真つ先にブリタニアに宣戦布告という事になりかねない。少なくともチャーチルはそう考えていた。

「はは、別に気にせんくださいよ。私らだって、その点は自覚しております。私に気兼ねする必要はありません。首相はお逃げください結構ですよ」

「……ふむ、君がそういうのならいいのだがね。いや、当然借りは返すとも。」

だがどちらにしろ、私は逃げるわけにはいかん」

チャーチルは葉巻を燻らせ、瓦礫の山に腰を下ろした。真岡は、やはりどこか面白そうな表情を浮かべてそれを見ていた。

秘書官は気まずそうに、チャーチルと真岡の双方を交互に見た。

「逃げるのは、ロンドン市民がすべて、避難を終えてからだ」

「し、しかし！」

「いいかね」

チャーチルは、やはり落ち着いた、諭すような調子の声で語りかけた。

「君がどう考えているかは知らないが、戦況厳しき折りには、政治家が取るべき道は二つしかない。ひとつは、反撃の時を待ち、退いて耐え忍ぶ道。もうひとつは、断固として踏み止まり、気概を示す道」

上空を、この時代の人間には覚えのない轟音を響かせて、やはりこの時代の人間には覚えのない鋭角的な形状の航空機の編隊が次々と

フライパスしていった。黒い翼には、小さく白線が円形を縁取っていた。《リライアント》の攻撃隊だった。チャーチルも、真岡やその周りの人々も何も発しなかった。

しばらくして、航空機が飛び去った方角から低音が響きはじめた。上空を通り過ぎていった《リライアント》の攻撃隊が、ロンドンに接近しつつあるネウロイに攻撃を開始したのだ。

その低音を、チャーチルは目をつむって何かに祈るような仕草をして噛み締めた後、言った。

「今、取るべき道は断固として踏み止まり、気概を示す道だよ」

彼は葉巻を再びくわえた。

「……首相」

「それに、こうして市民を激励するために視察に訪れておきながら、いざ、敵を前にして尻尾を巻いて逃げ出す事など、一国の首相として断じてできんだろう?」

チャーチルはそう言うと、葉巻の煙りを吸い込み、日本の航空隊が飛び去っていった方角を眺め、笑みをもらした。



ウィッチーズ別動隊 テムズ川

「さすがは戦時の名宰相と言ったところ?」

無線で詳しい説明を受けたミーナは微笑み、ウィッチーズに指示を出す。彼女達の眼前では、すでに《リライアント》から発艦した航空隊とネウロイが戦闘を開始していた。

川沿いに飛ぶウィッチーズからは、ロンドン橋が見える位置だ。攻撃隊は、ネウロイを囲んで一箇所に追いやるような攻撃を行っていた。

そこにミーナ達が攻撃隊の援護の為に突撃しようとしたところで、司令部から再び通信が入った。

「ウィッチーズ隊、こちらロンドン司令部」

何かしら、不思議に思いつつ、ミーナは返答した。

「はい！」

眼前にいるネウロイの群から赤い閃光。ミーナはそれを体を捻ることなどでなんとか回避した。

「日本の空域管制機から、ロンドン方面のウィッチーズ隊に宛てて通信要請が入っている。繋ぐぞ、空域管制機のコール・サインは八ンマー・ヘッドだ」

「了解！」

ミーナは叫び返した。すでに、彼女達に気付いたネウロイの一部が攻撃隊の包囲網を突破しようとしていた。攻撃隊はなんとかして突破を防ごうとしていたが、それは大型ネウロイがおそらくはロンドン攻撃用にとっておいたのである。小型ネウロイの全てを発進させ、

主に数の優位に立たれた事で、その努力は水泡に帰しつつあった。ネウロイは、数にものを言わせて強引に包囲網を破るつもりなのだ。本来ならいるはずの《レーガン》の航空隊の不在が、それに拍車をかけていた。

「ミーナ、空域管制機…だっけ？ 来たよ！」

斜め右後方を飛んでいたハルトマンが叫んだ。

周囲から接近してきたネウロイが放つ膨大な数のレーザーを受け止めているミーナのインカムに、明瞭な音声が飛び込んできた。空域管制機。六発のターボプロップエンジンが与える莫大な推力で高空を突き進み、機体上部に全周警戒の為のリーダードームを備え付けた、三人乗りの全長七メートル、全幅は五メートルにもおよぶ巨大管制機。彼らの任務は、今回の様な大規模戦闘においての戦闘空域全体の把握、的確な場所へ航空隊を適切に誘導し、送り込む事にある。

「ハンマー・ヘッドよりウィッチーズ隊。貴編隊を目視した。そこからはどうだ？ 解らなければ近くまで接近する。送レ」

ミーナはハルトマンの方角を見回した。ミーナ達とさして変わらぬい速度で飛行する、巨大な管制機の姿が見えた。灰色の塗装を施した、機体上部の円盤状の部分と、翼にある丸型だけが黒い《東海一型》。基本的に《富嶽》を拡大発展させたような姿だと思えばいい。

「ウィッチーズ指揮官よりハンマー・ヘッド。こちらからも貴機を確認したわ。私たちの右斜め後方を飛行しているわね？」

「そうだ。よし、君達に早速仕事を頼みたい」

包囲網を突破した一部の小型ネウロイのレーザーがハンマー・ヘッドに伸びるが、ハンマー・ヘッドはそれを機体に装備されている電磁防壁で防いだ。シャボン玉のような膜に弾かれ、レーザーが霧散する。

ミーナのインカムからハンマー・ヘッドが一瞬悪態を吐く声が聞こえた。

「見ての通り、現在、《リライアント》から発艦した攻撃隊がネウロイを包囲しようとしているが、連中の数が多すぎて上手くいっていない。そこで、君達には小型の数を減らしてもらいたい。それと可能なら大型の包囲完成への援護も頼む。包囲場所はテムズ川上空だ」

「了解しました！」

自身にレーザーを放っていた小型ネウロイの一機を撃墜し、さらに左から迫っていた一機を撃墜しつつ、ミーナは答えた。

包囲を突破したネウロイとの戦闘に入っているハルトマン達にも指示を出す。

「皆、聞いたわね？ 私たちはこれより日本の空域管制機の要請に従い、小型ネウロイの排除、可能なら大型の包囲に参加します！」

「了解！」

答えると同時に、彼女達が小型ネウロイに放っていた火線は激しさを増した。次々と小型ネウロイが吹き飛んでゆく。

「それにしても、何故テムズ川上空で撃退ではなく包囲なのかしら……」

それを見てばそつと呟いたミーナの言葉は、誰にも聞こえていなかった。



ウィッチーズ隊がテムズ川付近で戦闘を開始する少し前。ブリテン島近海、赤衛艦隊旗艦《リライアント》

この日、ロンドンシティ地区で行われている日本人の参加した戦闘は、その激烈さを増しつつあった。赤衛艦隊旗艦である《リライアント》、そのヴァイタル・パート内に設けられたCDCで戦況表示盤を眺めていた赤衛艦隊参謀長・山県吉景も、その点については異論はなかった。いや、むしろドーバーで繰り広げられている防空戦やウィッチーズ隊と協同して行っている迎撃作戦の全ての情報がここの一点に集中する分、他より余程事の重大さを理解出来ている。

赤衛艦隊が担当している地域は、ドーバー海峡からロンドンシティ地区にかけての広大な区域、さらにはウィッチーズ隊が親善会を開いていた村に向かっていているネウロイの大部隊（といっても、全体に比べたらごく僅かではある）までそこに加わっている。

結果、正直言つて、山県参謀長は頭を抱えている。担当している区域が広すぎる事に加え、ロンドンと守るべき村が離れすぎている為、対応に苦難しているのが現状だと彼は良く知っていた。

今のところ、彼が三浦から任されている艦隊はその主力である《ウ

「スター級全艦を村に向かっているネウロイに対して全速力で突撃させていて、そして村の方は一応それで大丈夫だと思われたが、かといってドーバー方面 特に大量のネウロイの攻撃に晒されている第10空母打撃群の状況がそれで改善されるわけではない。早急に、何らかの手を打たなければならぬのは明白だった。」

その為に彼はまず手始めに航空隊をロンドン方面に派遣していたが、やはりそれもロンドンへ向かっているネウロイの進撃を止めるには至っていない。それどころか、大型ネウロイがその堅牢さと数に頼った突撃をしているせいで、航空機の攻撃のみでは大した効果を挙げることが出来なくなってきた。

「いつそのこと、反応兵器の全面使用を許可しちまうか？」

「参謀長、それは……」

あまりにも弱り果てた山県がぼつりと呟いた危険過ぎる一言に、情報参謀が声をあげた。

「もし反応兵器の全面使用を許可した場合、世界中が我が国を槍玉にあげるでしょうし、政治的效果が大きすぎます。それに、もしそんな事したらロンドンまで灰になっちまいますよ」

「解ってる、冗談だよ。不謹慎すぎではあつたがな」

山県はそう言って疲れた笑みを浮かべながら、再び戦況表示板に目を向けた。そこには、《リライアント》から発艦した航空隊と、ロンドンの状況が表示されている。

戦務参謀が報告した。

「現在、ネウロイの主攻勢方面はロンドンと第10空母打撃群のい

るガリア沿岸です。このうち、ロンドン方面のネウロイ部隊は《レীগン》と我が艦の第一次攻撃隊によってすでにかなりの戦力を消耗しています。ですが、先程入った報告によりますとドーバー方面のネウロイが第10空母打撃群に対しレーザー照射を開始、今のところは電磁防壁で防げている様ですが、このままでは「航空参謀、君の意見はどうだ？」

山県は戦務参謀に頷くと、航空参謀に尋ねた。

「私の意見としては」

航空参謀が応じた。

「現在続けているネウロイに対する航空攻撃を何度でも反復してロンドン方面のネウロイを撃滅、そのちにドーバーへの支援を行う、としか申せません」

終わります、と言ってそれきり航空参謀は黙り込んだ。

誰もがうーん、と唸っていた。航空参謀の案は、今行っている行動を、そのまま言っているだけだと判っていた。しかし、他に方策がない以上、航空参謀を咎めるわけにもいかなかった。

「航空軍の支援は得られんのか？」

唐突に、山県がなにかを思い出したように戦務参謀に尋ねた。

「航空軍、ですか？」

「そうだ」

航宙軍という単語に何か思い当たる事があるのか、山県はその公家の様な細い、整った眉を片方だけあげて応じた。

「航宙軍は、まともな戦力を持っていません。ネウロイがあんな位置に巢を作ったせいで衛星を上げることでも危険だという結論が出ています。実際まともな戦力として数えられるのは……」

と、そこまで言って戦務参謀も山県の言いたい事に気がついたのか、驚いたような声をあげた。

「参謀長、つまり貴方は……」

「ああ、アレをつかう」

「ですが、アレをつかうにはロンドンには危険です。市街地では地上に被害が出る可能性があります」

「今出ている連中に敵を包囲させてしまえばいいだろう。確かあそこにはテムズ川があったはずだな？ ならばそこに敵を押し込めてしまえばいい。空域管制機からも敵の座標を送る事が可能だから、余程運が悪くないかぎり市民の損害は出ないはずだ。」

三浦閣下からも、許可はすでに出ているだろう？」

山県が情報参謀に確認を取ると、情報参謀はいい、と頷いた。

「通信参謀」

議論の流れが変わったことをとらえた参謀副長が発言した。

「すぐに嘉手納基地に要請を送ってくれ」





第八話 11 / 22 加筆（前書き）

次回からは、もう少しこう、ストライクウィッチーズらしくしよう  
と思うんで、多分三浦さんはもうほぼ出てきませんね。その代わり  
として武装神姫的な成分をウィッチーズに追加しようとか考えてお  
ります。

第八話 11/22 加筆

~~~~~

《リライアント》CDC

《リライアント》内部のCDC、そこでは、戦闘を行っている各部隊から送られてくる情報を整理する為に、水兵達が忙しく動き回っていた。赤衛艦隊司令部は、そこから各部隊に指示を出しつつ、ロンドンで戦闘をしている部隊からの通信を待っていた。

通信参謀が報告した。

「封じ込めはほぼ完了しました。包囲できたのは大型のみですが、小型の方は、ストライクウィッチーズが抑えています」

「《レーガン》の状況は？」

山県は通信参謀に頷き、尋ねた。

「それが……」

通信参謀がやや口ごもりながらこたえた。

「第10空母打撃群には損害が出始めています。護衛艦のうち、すでに四隻が電磁防壁を破られ沈黙」

「まさか、早すぎる」

山県の隣にいた参謀副長が呻いた。

山県も口に出す事はなかったが、彼の内心も参謀副長とまったくの同意見だった。

《レーガン》の所属する第10空母打撃群には防御重力場こそないが、電磁防壁を全艦に備えている筈で、それはネウロイのレーザーを完全には無効化できないが、かなりの対抗は可能だと考えられていたのだ。

「第10空母打撃群の方は、現有戦力で可能なかぎり耐えて貰うしかない」

山県は決定を下した。その表情は苦り切っている。

「だが、我々も出来る限りの事はしなければならん。ロンドン方面の片がついたらパイロット達には悪いがもう一踏ん張りしてもらおう。村の方の安全は確保されたな？」

最後の質問は、戦務参謀に向けたものだった。



そこはテムズ川でもロンドン橋に程近い、川の両岸のほぼ中央の地点だった。周囲をネウロイから放たれるレーザー、航空機から放たれるミサイルが飛び交っている。レーザーが当たった航空機には電磁防壁でそれを弾くもの、度重なる被弾にジェネレータが焼きつき、電磁防壁を破られ四散するものがあつた。勿論の事、ネウロイ側もただで済んでいるわけではない。すでに小型ネウロイは殲滅され、

残された数十機の大型も、強引に包囲し続けようとする航空隊の決死の行動によつてテムズ川流域から出る事が出来なっていた。ミーナ中佐はその中で部下であり、仲間であるストライクウィッチーズの隊員と共に航空機の群れを支援しつつ、空域管制機　ハンマー・ヘッドと通信を交わしていた。

「ミーナよりハンマー・ヘッド。こちらは小型をほぼ片付けたわ。そちらは？」

一瞬の空白の後、応答があつた。ミーナのインカムから聞こえてきたその声は多分に感情を含んでいた。

「こちらハンマー・ヘッド。いや、たいしたもんだよ君達は。まったく、惚れ惚れする腕だった。どうやら俺は君らのファンになつちまうみたいだ」

「ありがとう。でも」

いきなり言われたのでなんと返していいか迷い、一応無難だろうと思われる答えをミーナがそこまで言いかけた時、インカムから先程の空域管制機のパイロットのものとは違う男の声が響いた。

「……退避、退避、敵の現在位置を確認、座標マーク後、空域管制機、及び付近に展開する全友軍部隊はただちにテムズ川河川領域より退避せよ。退避方法は自由。ラインベースより、以上」

ミーナは眉をひそめた。疑問が起こる。何故。どうして。現状は私達の優位じゃない。確かに、大型の数は多いけど、味方の航空隊と協同すれば……。

再びインカムから声が聞こえてきた。ハンマー・ヘッドだった。

「ハンマー・ヘッドよりストライクウィッチーズ各位。今の通信は聞いたか？」

ウィッチーズの面々からの返答があり、続いてミーナも返答した。

「聞いたよ！」

「こちらでも確認した」

「聞いたぞー」

「聞いたわ」

「確認しました」

「よし、ならいい。今の通信は《リライアント》からのものだ。包囲作戦は成功した。君達も今すぐそこから離れる。さもないとひどいことになるぞ」

「そんな！？ 待つてください！ まだあそこに」

ネウロイが　ハンマー・ヘッドにミーナがそう言って、《リライアント》の航空隊が包囲している筈のネウロイの群れを指そうとした時、すぐ近くで轟音がした。鋭角なデザインの航空機　《リライアント》の艦上機だ。彼らは、ネウロイの包囲網を解いていた。当然、包囲から解き放たれたネウロイは、ロンドンのシティ地区方面へ向けて再び突進しようとする。このままいけば、ロンドンが灰になるのは確実だった。

だが、大型ネウロイの一機がロンドン橋に差し掛かった時に、それは起きた。

突如として上空から白い五条の光芒が伸びた。五条の光芒はロンドン橋に今しも辿り着こうとしていたネウロイを串刺しにして、一撃で消滅させてしまった。皆、光芒の伸びてきた方角へと注目した。

上空、いつもなら雲がかかっているロンドンには珍しい晴天の光景。しかしそこには一つ黒点があった。その黒点は、今もシティ地区へ向けて移動しようとしている大型ネウロイの群れに向けて次々と白い光芒を照射し続けている。

「なんなの、あれは……」

その黒点を見上げてミーナが抱いた感想は、その場にいたウィッチーズの全員が内心で同意した。

~~~~~

通信参謀が報告した。

「《アーク・バード》、照射開始しました。以後、テムズ川流域のネウロイ殲滅まで、設定された座標付近を叩きます。殲滅後は、《レーガン》空母群の救援に向かうそうです」

山県は疲れた表情で頷いた。息を吐き出す。胸ポケットから小型端末を取り出し、その画面に出ているボタンの幾つかを押して、三浦との回線を開き、三浦の持っている小型端末に今回の戦闘の情報を送った。

その間にも、次々と報告が飛び込んでくる。

「第二次攻撃隊収容開始しました。再出撃まで、一時間」

「《アーク・バード》、大型ネウロイ殲滅率現在約四パーセント。

殲滅率増大中」

「ストライクウィッチーズ、ロンドンより移動開始。一五分後に第10空母打撃群と接触」

(我々は、勝った)

山県は思った。これで、川の真上に追い詰められた敵は、テムズ川上で消滅するだろう。あと四、五分ほども、《アーク・バード》があのおそるべき照射攻撃を続ければ。それが済めば、あとは全部隊をドーバーに向かわせ、《レーガン》を襲っている敵を掃討させて、一幕の終わりだ。

しかし、果たして今回のこの勝利には、何か意味があるのか？

それは、山県が、日本がこの戦争に参戦した頃から抱き、そして《レーガン》の付近に四 を超える大型ネウロイが出現したという報告を聞いた時により強くなった疑問だった。果たして、我々があの程度のネウロイを撃破したところでどれ程の効果が望めるだろうか？ これで、もう次の大規模侵攻はなくなるのか？ それとも、ただ我々の戦力がどれ程のものを、世界に宣伝するためか？ あるいは、うちの大将が、ただ己の中にある自己顕示欲を満たしたいがためか？

どれも違うな、と彼は思った。

だからといって簡単に答えが見つかる訳もない。どれかといえはふたつ目の考えが一番正解に近い気もしたが、彼はそれを否定した。機械としての体で、人間に極々近い思考回路を持っているからだろうか、彼は、人間としての回答を探していた。もちろん、軍人としての回答ははっきりしている。勝利より悲惨な光景は、敗北しか存

在しないからだ。

そう、たとえどれほど悲惨な勝利であっても、それは、偉大な敗北より好ましいものなのだ。

彼がそこまで考えたところで、三浦の端末から、彼の端末へ短い文が送られてきた。彼はそれを見ると一瞬目をしばたかせ、続いて少しの喜びと満足を胸に抱きながら、端末を胸ポケットへとしまった。

端末に表示された文には、こう記されていたのである。

『参謀長、および日本国の勇敢な国民たち。私は、君たちに感謝の意とともに、この言葉を送ろうと思う。』

皆、有り難う』

~~~~~

戦いが終わったその日の夕方。親睦会が中止されてしまった事で故郷の、というより家伝の特製タコ焼きを村の人々に振る舞うことができなかつたと思痴る芳佳やペリーヌ、それに坂本達ウィッチーズの隊員が集合写真を撮り終わって解散した後、オーウェル記者は、親睦会が行われた村からヘリで《リライアント》へと帰ろうとしている三浦を偶然見かけた。

(そういえば、今日のもう一つの特ダネを忘れていたな)

彼はこの日の日中、胸に記者としてではなく人としての矜持 無

くてはならない大切な何かを自分は取り戻したと考えたのもう記者魂が復活しようとしていることに内心で少々嫌気がさしつつも、結局は一度気になったら色々詮索したくなるのが記者の　　といふより俺の性さがなのだ、と己を無理やり納得させた。

そして、そう考えてしまえばあとは早いものである。彼は先程の迷いはどこへやら、今日ドーバーで行われた戦闘について聞いてみようと思いついて今しもヘリに乗り込もうとしている三浦に近付いていった。

「ミウラさん、ちょいとお時間いただいてよろしいか？」

オーウエルが声をかけると、三浦はヘリのパイロットと二言三言言葉を交わしてから、オーウエルに向き直った。

「構わないがね、何かな？」

オーウエルは礼を言いつつ、ヘリのたてる音に負けないように声を大きくしながら尋ねた。

「今日行われた戦闘の事なんですがね」

しかし彼がそこまで言うと、三浦は右手を上げて彼の質問を制し、続いて、こちらへと行ってヘリの奥の方にある空いている座席を指差した。

「申し訳ないが、今日の戦闘の事を知りたいのなら私と一緒にきてもらったほうが手っ取り早い。来てもらえますか？」

その三浦の言葉を了承したオーウエルがヘリに乗ると、彼の後に続

いて入ってきた三浦は彼の隣にある座席に座り、パイロットに発進させると命じた。パイロットは了解と答えて、へりを発進させ、一定高度をとるとおそらくは《リライアント》がいるであろう方角へとへりを向かわせる。

オーウエルが座席の上で体を落ち着かなげにそわそわさせて辺りを見回していると、隣に座っている三浦がそれを見かねて声をかけた。

「どうかされましたかな？ 何か気になることでも？」

「いや、そういう訳じゃないんですがね。ただ、私はこういう乗り物に乗ったことがないので、珍しいのもありますが、少し酔いそうでした」

オーウエルがそう答えると、三浦はああ、そうでしたか、でもまあ、もう一五分くらい経つ頃にはそういう気持ちも収まっていますよ、と言って酔い止めがありますか、呑みますか、と彼に錠剤の入った瓶を渡した。

彼は礼を言つてそれを受け取ると、中に入っている錠剤の幾つかを呑んで、それから《リライアント》にへりが着艦するまでの間、生まれて初めて乗ったこの乗り物に耐えた。

操縦席に座っているパイロットが《リライアント》に着艦許可を求めている声が聞こえてきたことで、母艦に接近したのか、そう思ったオーウエルの肩を、隣に座っていた三浦が叩いた。オーウエルがそちらを向くと三浦は機体の横にある、広い窓の外を指差した。覗いてみるという事らしい。

「じりゃあ……」

彼は、覗いた窓からの視界の下に広がる光景に思わず嘆息した。

彼が窓から見た海の上には、見慣れない双胴の航空母艦と、無惨に傷ついた航空母艦が並走していた。傷ついた空母は、その飛行甲板の中央が焼けたようにめくれあがり、艦の内部構造を晒していた。^{アイランド}艦橋にも攻撃を受けたためだろう、アイランドの前半部分は消失している。その他にも機関を損傷したのか、その空母の航行速度は這うような速度だった。双胴空母の方は全く傷ついていないらしいが、傷ついている空母に配慮しているためらしい、両艦とも、非常にゆっくりとした速度で航行していた。遠くには二隻の空母の護衛艦と、思わしき艦がキロ単位の距離を空けて輪形陣を組んでいるのも見える。

そしてさらに彼が傷ついた空母をよく見ようとしたところで、へりは双胴空母へと着艦した。

オーウェルがへりから降りて、その広い飛行甲板を三浦について艦橋のほうへ行くと、一人の男が艦橋のほうから歩いてくるのが見えた。男は三浦のそばまで行くと、三浦と短い会話をしたあとにオーウェルのほうへと向かってきた。

三浦が男を紹介した。

「彼は赤衛艦隊司令部参謀長の、山県吉景です。彼が今日の戦闘の指揮全般を受け持っていました」

紹介された山県という男はオーウエルに会釈すると、その細い顔立ちに疲労の色を浮かべたまま、しかしそれを感じさせないような声でオーウエルに確認を取った。

「本艦に乗艦されるのは初めてですね？ 今日には戦闘の詳細を聞きたいとか」

オーウエルがそれに頷くと、山県はわかりました、それでは三浦長官と私の後についてきてください、といって三浦とともにアイランドの扉を開いて艦内に入っていた。オーウエルも、そのあとについて艦内に入る。

そうしてしばらく艦内を三浦と山県について歩くと、やがて三人はひとつの扉の前に辿り着いた。

「どうぞ」

オーウエルが三浦に促されて部屋に入り、続いて三浦と山県も部屋へ入った。

その部屋は学校の教室ほどの広さで、室内にある長方形のテーブルには、封筒が二つ置かれている。扉を閉めた三浦がそのうちの一つを手にとり、オーウエルに差し出した。

「そちらが先程貴方が見た、我が艦に並走している空母を含めた艦隊の航空写真と救助活動に向かった艦の乗員が記録した艦内の写真で、これが、今日の戦闘結果です。これらの情報は一般の情報公開が可能な物ですので、持ち帰ってもらって結構ですよ」

オーウエルは三浦が渡してきた封筒と山県から受け取った封筒のど

こちらを先に見るか少々悩んだが、まずは先に写真の方を見ることにして、三浦から受け取った封筒の封を切って中から写真を取り出した。

写真を見たオーウェルは、思わずつつ、という声を出してしまった。そこに写されていたものがあまりに悲惨なものだったからだ。写されている物は、オーウェルがいつきも見た空母が大火災を起し、黒煙に包まれて傾斜しているもの、艦体が分断されているのだろう、艦首と艦尾を立てて沈んでいく特徴的な艦橋を持った軍艦、そして燃え盛る艦内で片腕を失い、そこから機械の配線や鉄の骨格がはみ出でて体のあちこちが焼け焦げている、どうみても瀕死の重症の水兵が担架に乗せられて外に運び出されている光景だった。

オーウェルはそれを見るうちに三浦についてきた事をやや後悔したが、気を取り直して、もう片方の封筒を開ける事にした。

だが、その封筒も、あまり彼の気を軽くしてはくれなかった。

そこに表記されていたガリア沿岸からドーバー海峡で行われた戦闘の結果もまた、日本の艦隊が甚大な被害を受けた事を伝えていたからだ。

ただ、彼にとって（というより人類にとって）喜ばしい知らせも、同時にそこには記されていた。潰滅した空母群 第10空母打撃群は、潰滅の代償として、ネウロイを数百機道連れにしていたからだ。

《リライアント》からヘリで本社まで送られ、再び母艦へと戻っていくヘリを見送りながらオーウェルは考えていた。彼の手には、《リライアント》で三浦と山県から渡された二つの封筒がある。

(さて…これから記事を書かねばならないのだが……)

正直なところ、予想外なネタが転がり込んできたせいで、彼は明日の新聞に載せる記事をどうすればいいだろうかと悩むはめになってしまっていた。

もちろん、ウィッチーズの記事は載せる。これは確定事項だ。だがしかし、彼は《リライアント》で受け取った二つの資料も無駄にはしたくなかった。

そうして本社に入って、自分のデスクについてからも難しそうに唸っている、それを見かねた同僚に何をそんなに難しい顔をしているんだと尋ねられたので、彼はウィッチーズと日本の記事、どちらを書こうか迷っていると正直に答える事にした。

「いや、実はなボブ。今日、僕はストライクウィッチーズが親睦会をやっているところに取材に行っただろう？」

「ああ。そうだな」

ボブと呼ばれた同僚は、だからどうした？ という表情で無言の質問を返す。

「それがな、そこにはなんと日本のトップ、ミウラ大元帥が居ただよ。村との親睦を深めるついでに、今まで冷えきっていた日本と

の交流もあるという事を見せたかったんだと思う」

「まさか、それだけで大スクープじゃないか！」

「まあ待つてくれ、話はそこで終わりじゃないんだ」

オーウエルは額をほとんど叩きながら続けた。

「ボブ、君も知つての通り、今日、ロンドンとウィッチーズが親睦会を開いていた村が今までなかった程のネウロイの集団に襲われた」

「ああ、村の方は君の担当だったから知らなかったが、僕は今日ロンドンに居たからね、あれはごつい眺めだったぜ」

「ボブ、君が何を見たのかは気になるがね、今それは問題じゃないんだ」

オーウエルの素っ気ない態度に同僚は一瞬傷ついた様な表情を浮かべたが、気を取り直して尋ねた。

「しかしな、ジョージ。君は間近である有名なウィッチーズの取材が出来たんだぜ？ しかもあのネウロイの野郎共が村まで襲撃してくるなんて特ダネまである。一体全体、何に困るっていうんだ？ ネタなら腐るほどあるじゃないか」

「それだよ、それなんだ、僕が困っているのは」

オーウエルは嘆息した。

「ネタが無い訳じゃない、むしろ有りすぎて困ってるんだ」

「そりゃ、どういう事だ？」

「これを見てくれ」

オーウエルは自分のデスクの上に置いてあった二つの封筒、その写真が入っているほうを同僚に手渡した。

「これは？」

「見ればわかる」

同僚は不審に思いつつも封筒を開け、そしてオーウエルが漏らしたのと同じ様な声を漏らすと、封筒をオーウエルに返しながら尋ねた。

「こりゃ……どういう事だ、ジョージ？ これは日本の船の写真じゃないか。何でそんな物を君が持つてるんだ」

「それが聞いてくれよボブ。ストライクウィッチーズの取材を終えて、僕は帰ろうとしていたんだ」

「ああ」

「だけどそこで僕は偶然ミウラが帰ろうとしている所に出くわして、そつえば今日はまだもう一つ特ダネがあつたつて事を思い出した」

「それで？」

「それで、僕はミウラに『今日の戦闘の詳細を教えてもらえないだろうか』つて聞いたんだ。そしたら

「オーウエルはデスクに置いてあつたほうの封筒も手にとって、同僚の前ではたばたとさせた。」

「そついう訳か」

同僚もようやくやく得心がいったように頷いた。

「で、君は魔女の記事も書きたいが、そつちの記事も書きたいつて訳だな？」

「ああ。折角手に入れたんだ、無駄にするのは僕の主義に反する」

「だけどなあ、と続けてオーウエルは言った。紙面一杯を僕が独占で

きるって訳でもないから、どちらかを諦めなければいけないんだ、悲しい事に。

同僚は答えた。心なしか、興奮しているようにも見える。いや、事実興奮しているのだろう。

「おお、ジョージ、何を言っているんだ、君は！ こんな機会は滅多にないんだぜ！？ ウチのボスだって認めてくれるさ！」

「そうかな」

「そうとも！」

彼は断定した。

「でなけりや、ウチは下の下の新聞会社って事になる。理解してるか？ お前は世界で最初に、二ホンの軍艦に乗った新聞記者なんだぜ？ はっきり言ってお前は今、最高の新聞記者さ！」

「わかった、わかったよボブ」

あまりに熱を入れて語ろうとする同僚にオーウェルもついに折れ、同僚に頷くと、彼は書類を持って立ち上がった。

「それじゃ僕はボスの所に行って、拝み倒して紙面のページ数を奪ってくる事にするよ。きっと僕は他の記者に恨まれる事になるだろうしな」

「何を言ってるんだい」

言葉とは裏腹にそう朗らかにいった彼に、同僚は、同じく朗らかに言葉を返した。

「それが、俺たち新聞記者さ」

~~~~~

そして、翌日の新聞にはオーウエルの宣言通り、彼の書いた記事がその新聞の殆ど全てを埋め尽くしていたのである。

~~~~~

ネウロイの襲撃から幾らか日の経ったある日。

ウィッチーズ基地の兵舎の前に、隊長のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐以下、魔女たちが勢揃いしていた。

「はい、どうぞ」

ミーナが、一同に一人の少女を紹介した。

「今日付けで連合軍第501統合戦闘航空団に配属となりました、制式名称、対ネウロイ制圧用五式戦闘攻撃機、通称《ソロル》です」

そう自らを戦闘攻撃機と名乗った少女の眼は青く、髪は淡い金色だ。そして手首や肩、膝や足首の関節には彼女が機械でできている事を示す様に、通常の間人では有り得ない様な接続部分が露出していて、更には服に覆われていない体の表面　腕や足には金属特有の光沢があった。つまり、彼女はロボットという事だ。ちなみにこの場合の五式というのは単純に制式番号を西暦から採用しただけの事だから、大した意味はない。

「彼女は、先頃赤衛艦隊が第501統合戦闘航空団から引き抜かれてカールスラント、及び東ヨーロッパ各地の支援に回されたため、そのかわりとして、日本から新たに私たちの部隊に配属される事になったのよ」

ミーナが補足した。

紹介されたウィッチーズのメンバーは、芳佳の時と同様に欠伸をしたり、小さく手を振ったり、舌を出したりと、その反応は様々だったが、全体の空気としてはまあ友好的と表現して差し支えない雰囲気だった。

（何で、彼女からはネウロイと同じ様な気配がするんだろう……）

ただ一人、サーニヤ・V・リトヴァク中尉をのぞいて。

第八話 11/22 加筆（後書き）

御感想・御指摘お待ちしております。

第九話

~~~~~

ソロルがウィッチーズ隊に入隊してから数日が経過したある日の夜。いつもの様に坂本の厳しい訓練を終え、帰って寝ようと思っていた芳佳は兵舎に戻る途中、日中の訓練でのソロルの様子を思い出していた。

彼女は今日の訓練では、まだ武装が本国から届いていない為にひたすら地上訓練をしていたのだが、やはり機械だからなのか、まったく疲れた様子を見せずに黙々と坂本の課した訓練をクリアしていた。訓練が終わった後は、その寡黙さと実直さが気に入られたのか、バルクホルンと色々と話をしていたようだ。

そんな事を考えながら歩いていると、ソロルのハンガーの近くで見知らぬ女性と会話をしているソロルとミーナを見かけた。三人の横には、やや大きなコンテナの様な物もあった。

(あれ…何やってるんだろう…?)

知らない女性も気になるが、コンテナも気になる芳佳は、三人に近づいていくと声をかけた。

「ミーナ隊長、何やってるんですか？」

「あら、宮藤さん」

芳佳に気付いたミーナは振り返ると、芳佳に女性を紹介した。

「こちらは篠原小織大尉。日本の統合戦略研究所という所からソロルさんの」

ミーナはコンテナを指した。遠くからではわからなかったが、コンテナの周りには何人かの整備兵と日本の濃紺色の軍服を着た数人の将校がコンテナの中からピストルの様な物や、ソロルのストライカーだと思われる物を取り出していた。ただ、おかしな事にそのストライカーにはプロペラがなかった。ちなみに後で芳佳がミーナから聞いたところによると、その将校達は日本の技術将校で、特殊な兵器の整備の仕方を教える為に篠原大尉が連れて来ていたらしい。

「武装を持ってきてくださったの。それと定期的にソロルさんをメンテナンスの為に基地に来る事になるそうだから、これから何度か会う事になると思うわ。篠原大尉、こちらは先程話していたウィッチーズのメンバーで、宮藤芳佳軍曹です」

「よろしくね、宮藤軍曹」

ミーナに紹介されると、自らも将校達と同じ濃紺色の軍服を着込んだ篠原は芳佳に手を差し出した。

「あつ、はい！ よろしくお願いします、篠原さん」

芳佳は慌てて差し出された小織の手を握り返した。芳佳は彼女の手が冷たいと感じた。人間と感触は同じだが、体温は感じられない。

芳佳が手を握り返すと小織はうん、やっぱり人間は温かいねと言ったあと、ソロルに向き直った。

「じゃ、私はこれで本国に戻るからね。基地の方々迷惑をかけては駄目よ、ソロル」

「迷惑をかけるつもりなどありません」

小織はそんなふうに通言するソロルを見て微笑んだ。あらあら、本当かしらねえ。

「できれば貴女もこの娘の事、気にかけてやってもらえますか？どこかで教育を間違えたのか、ちよつとお堅い性格になつちやつたのよね」

芳佳はそれにあはは、と苦笑いを返しながら思った。ソロルちゃんって、やはりバルクホルン大尉と気が合うんじゃないだろうか。

(だとしたら)

この人はハルトマン中尉かなあ、と。

「これで、貴女の武装も届いた事だし、明日からは貴女も皆と同じ様に飛行訓練が出来るわね」

篠原大尉が、連れて来た将校と共に日本の輸送機で帰っていくのを見送り再びハンガーに戻った時、ミーナがソロルにその声をかけた。

「可能ですね。ああそれと、ひとつよろしいでしょうか」

ソロルが訊いた。

「いいわよ。何？」

「私は一応、万能機として設計されたのですが、実際には後衛の方が向いていますので」

「わかったわ」

ミーナは首肯した。

「では、明日は貴女をリーネさんと模擬戦させます。彼女なら、後衛の戦闘も得意だからいい練習相手になるでしょう」

「あの、それはいいのですが……」

しかし、ソロルは言いにくそうにしながら口を開いた。

「私の遠距離用兵装は大威力な上に模擬弾という物が存在しないのです。先程篠原大尉から中佐に説明されていましたように、私の兵装は貴女方に近いところでは《アーク・バード》の積んでいた様な光学兵器が主体ですので」

どうも、模擬戦というのは無理があるのでは、とソロルが言うと、それまで黙っていた芳佳が手を挙げた。

「あ、あの！ それなら私が！」

「宮藤さんが？」

思わぬ人物の立候補にミーナは目を丸くしたが、ソロルはむしろそれに肯定的だった。

「確かに、宮藤軍曹なら私の攻撃を受けても平気かもしれません。」

私も兵装の出力を絞りますから、宮藤軍曹の戦闘データを見た限りでは耐え切れれると思います」

「そう、それなら……」

ミーナは決めた。

「うん。宮藤さん、お願いできるかしら？」

「任せてくださいー！」

~~~~~

翌日。ウィッチーズの（というよりソロルの）模擬戦を行う為に訓練場所へと呼び出されたのは、ウィッチーズだけではなくた。

日本の統合戦略研究所もまた、ミーナ、芳佳と別れた後ソロルが送った通信を受けて今回の模擬戦の為に海軍から観測船《猪苗代》を借りて、訓練海域へと送り込んでいた。この観測は、第501統合戦闘航空団司令部の許可も下りている正式な観測なので観測船を訓練海域へと派遣する事について、特に問題はない。

（まあったく）

なんでこんな事に、《猪苗代》の観測室で兵達が機械を操作しているのを眺めながら、平井政弘技術大佐はそう考えつつ傍らでウィッチーズ隊の訓練を見上げて子供の様に目を輝かせている篠原大尉に尋ねた。

「大尉。なぜこの様な訓練に私が付き合わされねばならんのだ？」

だいたい君な、あれは」

平井大佐は作業中の水兵から目を離し窓の外　空中戦を繰り広げているソロールと芳佳を指差した。

「君が担当しとる筈じゃなかったか？」

「なに言ってるんですか、主任」

篠原大尉は技術者特有の新技术に対する憧れや興味といったものを顔に浮かべたまま、平井が見ているものと同じものを見ながら答えた。

「あの娘の搭載しているコアは『プロジェクト・S』^{ソロール}の
「大尉。それ以上はここでは口に出すな」

平井が、口を滑らせそうになった篠原を制した。今回、統合戦略研究所が模擬戦の観測依頼を出したとき、模擬戦の観測を許可する代わりに、という条件でこの《猪苗代》には第501統合戦闘航空団の司令部からも何人かが乗船していた。篠原が先程言いかけたのは、その中でも特に《ウォーロック》と関わりがあると本国の比良坂市にある統合情報局の第五課　つまり対外諜報部が目をつけているマロニー大将等の人物が乗船している様な状況で発言して良い事柄ではなかった。

「申し訳ありません。」

「ですがまあ、主任もそう思うでしょう？」

「ああ」

平井はさっきとは異なる声音で応じた。

「主任」

その時、一人の水兵が扉を開けて入ってきた。

「マロニー大將がお呼びです。五式戦攻のスペックを聞きたいとの事です」

「大尉。君が行け」

平井は、再び横で子供の様にソロルに見入っている篠原に命じた。

「私が…ですか？」

命じられた篠原はその整った美しい、そう表現して良い顔に怪訝そうな色を浮かべた。呼ばれているのは主任でしょう？

平井はそれを見て言った。

「君のほうが俺よりよほど詳しくあれのスペックが頭に入っとるだろう？」

顔に笑みというほかない表情を浮かべたまま命じた上官を見た篠原は、なんだ、結局主任もこの模擬戦が楽しみだったんじゃない、と感想を抱いたあと、これから自分が行う役を考え気が沈んだ。あーあ、あの娘は私が担当のはずなんだけどなあ、私は死に物狂いでソロルの情報を聞き出そうとしてくる小父さんの相手かあ。

もちろん、彼女はそれを頭の中に浮かべただけであるから、表面上は顔をにこやかにしつつ、マロニー大將らが待っている甲板上へと歩を進めた。

「うむ。通常の空中戦は可能だな」
「はい」

観測船《猪苗代》の上空で今まで空中戦を繰り広げていたソロルと宮藤のもとに飛んできた坂本が言った。

「それなら、次はいよいよそのレーザーライフルの」

坂本はソロルの背中に装着されているリアウイング　その左側のハードポイントに取り付けられている（少なくとも人間大の大きさにとつては）巨大なレーザーライフルを指差した。

「威力を見せてもらうという事になる訳だな。よし。宮藤、ソロル、状況開始！」

「はい！」

「了解」

坂本の号令と同時に二人は動きだす。

芳佳はソロルから離れるかたちで八メートル先の海上へ。

ソロルは、その芳佳に対して左翼にマウントされていたレーザーライフルを取り外し、発射体勢をとる。

「NCドライブは依然順調に稼動中。次は兵装ね」

ソロルは武装と素体との接続状況を確認めた。ソロルの積んでいる武装の中でもレーザーライフル、そしてレールガンやライトセイバーはその武器の特性上、出来得る限り、出撃時には素体との接続状況確かめる必要があったが、今回はさらに模擬戦という事で、より綿密に確認しておかなければならなかった。

「NCER-TYPE00、素体とのリンク、正常に完了。出力、安定値到達を確認」

そしてNCER　つまりレーザーライフルが正常に自分の体と接続されている事を確認すると、次に彼女は最後の手順　レーザーライフルの出力を上げ、照射準備に入った。

ヘッドセットに《猪苗代》から通信が開かれた。

「こちらでもソロル、君の状態は確認した。こっちはウィッチーズのお偉いさんが君のスペックを教えろと煩くてね。面倒だから、彼等に実際にさっさとやって見せてくれ」

ヘッドセットに響いてきた中年ぐらいの男の声はそうソロルに要求してきたあと、でもまあ、ちゃんと稼動して良かった、と言った。

「了解」

ソロルは答えた。

「NCER、NCドライブからのエネルギー供給率57、2パーセント。照射可能」

レーザーライフルの発射口に紅い光　ネウロイのレーザーと同じ

色の光が収束されていく。

「照射開始。 目標への到達まで、0.003秒」

ソロルがそう言うと同時に、発射口に収束されていた光がエネルギーとして解き放たれた。

レーザーはソロルの宣言通り、芳佳とソロルの間にあつた八メートルという距離を瞬きする程の間に突破し、芳佳が照射開始を聞く直前に張ったシールドへと直撃した。

「くっくっくっ！」

レーザーを受け止めた芳佳の口から、苦しげなうめき声もれた。

芳佳の体が、レーザーによっておされていく。このままいけば、すぐにでも芳佳のシールドは破られてしまうだろう。

だが、五メートル程も芳佳が後退したところで、坂本から状況終了が命じられた。

「宮藤。 どうだった？」

「すごい光だったけど、芳佳ちゃん、大丈夫？」

芳佳がソロルの所へと戻ってくると、他のウィッチーズも我先にと芳佳達の方へと飛び寄ってきて口々に尋ねた。芳佳がそれに答えて

いるとソロルが宮藤に礼を言った。

「有り難うございました、宮藤軍曹」

「いや、それほどでも」

「ヴィルケ隊長。坂本少佐。以上で私の性能は把握して頂けましたでしょうか？」

ソロルがこの訓練の監督役である二人に尋ねた。

「ええ。貴女の能力は把握したわ。空中戦の能力は中の中、遠距離砲撃戦の能力は上の中、近接戦の能力は下の上。完全に後衛型ね」

「お前には、リーネと同じく後衛を担当してもらう事になる。いいな」

「了解しました」

そう答えたソロルを見て、一人やや複雑な気持ちを抱いている者もいた。

(なんだ…あいつは後衛か……)

最近、訓練でのソロルの真面目さやあまり話さない(というより騒がない)という事を知ったバルクホルンは、ハルトマンには悪いが少しだけソロルと組んでみたいと感じていたので、いやいや、今回の後衛にソロルが配置されるというのは自分にとって欲を断ち切るきっかけになったのだから良い筈だ、そう考える反面、少し惜しい事になったな、そうも思っていた。

「あれー？ トウルーデ、なんだか残念そうだねえ？」

そして、そんなバルクホルンの微妙な気持ちを敏感にも感じ取った

のが、たった今彼女が悪いなあと思っていた相手、ハルトマン中尉だった。

「い、いや！ そんな事はないぞ、うん！」

バルクホルンはそれを慌てて取り繕おうとするが、彼女は元々が隠し事が向いていない性格であるのに加え、ハルトマンは長年一緒に戦ってきたダブルエースの双壁だ。結局、すぐにばれてしまうのは簡単に予測できた事であった。

「まあ、トウルーデがそんなにソロルと組みたいっていうんなら止めないけどさあ〜」

ハルトマンはひらりひらりとバルクホルンの周りを旋回しながら自分を指差して、からかう様に言った。

「そんなに移り気だと、嫁も逃げて行っちゃうよ？」

「ば、馬鹿言え！ 何を言うか、貴様という奴は！」

「あはは〜」

バルクホルンは顔をやや赤くしながらハルトマンに言い返した。規則に厳しいお堅い性格の人間の一部に有りがちな様に、彼女もまた、その手の話題には弱いらしい。

「フフフ」

「バルクホルンさんって、こういう話には弱いんですね」

終いにはソロルに笑われ、芳佳に指摘された事で、バルクホルンは完全に紅潮した。そして、周りのウィッチーズ達もそんなバルクホルンの反応が可笑しかったのか笑ったお陰で、彼女は訓練から帰還

する時、いつもより妙に小さく見えたど、のちに芳佳はその時のバルクホルンの様子を語った。

ウィッチーズの訓練が終わったその日の午後、観測船《猪苗代》の艦尾に備え付けられた大型ヘリポートから飛び立ったCH-47がその寸胴な印象を与える機体を第501統合戦闘航空団の滑走路に降ろした。

この機体は最大で三名の乗客を乗せる事が出来たが、着陸した機体から降りてきたのは濃緑色のイギリス空軍の軍服を着込んだ二人と、白衣を着た一人の老人だけだった。若い方の士官は書類を下げていたが、その他には何も持っていない。

「車の準備は出来ております」

彼らを出迎えた大尉が敬礼をして言った。背後の合衆国製のジープを指して続ける。

「司令部までお送りします」

「まったく、魔女どもにあの日本人の機械人形どもめ。今日の訓練ときたら」

年かさの士官 第501統合戦闘航空団司令のトレヴァー・マロニー
二大將が最近になってやや中年太りをし始めた身体をジープに乗り込ませながら、煩わしそうに言った。

「昨日の深夜にいきなり通信がきたと思えば観測の許可だと？ そ

のうえさつさと発射試験をやらせてしまえばいいものを数時間もドッグファイトや空中近接戦の訓練なぞやりおつて、何の為に今回我々が観測の許可を出したと思つとるのだ」

「ですがまあ、ある程度の情報は入手出来ましたし、実地で見れたのは大きいのじゃないですか」

学者のような顔にひょうきんな仕草というなんとも不釣合いな老人がなだめる様に応じた。

最後に若い士官が乗り込むと同時に、ジープは急発進した。

白衣の老人は、学者の様な顔というか、事実彼の職業は学者なのであるから当然といえば当然のその顔立ちに満足そうな笑みを浮かべて言った。

「たしか五式戦闘攻撃機、通称《ソロール》といいましたかな。彼女は非常に素晴らしかったです。ええ。運動性、速度性能、多彩な兵装の数々……どれをとつても一級品と言える物ばかりでした。おそらく、彼女が一機いれば、ウィッチ数人分の働きが期待できるでしょう」

「それはいいがね、教授。《ウォーロック》と比べた場合はどうなのだ？」

マロニーは気になっていた事を尋ねた。本来なら、このようなジープに乗っている状況で話すべき内容でない事は承知しているが、今回は運転手も計画関係者である為、それが許された。

「何を言ってるんです」

教授と呼ばれた老人は先程まで行われていた訓練を思い出して段々

と興奮してきたらしく、ハイな口調で応じた。

「勿論、《ウォーロック》が最強ですよ！ これだけは譲れませんな！ 確かにあの娘は素晴らしい性能を持っていましたが、《ウォーロック》はそのさらに上をいきます。速度の面では若干劣りますがそれ以外の点、特に火力面と装甲面、そして何よりアレが、《ソロール》との決定的な差です。

断言しましょう」

老人は、狂気という他ない色を顔に浮かべて言った。

「《ウォーロック》なら、《ソロール》を破壊できます」

その言葉を聞いて、マロニーは満足げに頷いた。

「よし。ならば急ぎ一号機、そして二号機を完成させる。

それこそが、我々人類の切り札となるべき存在なのだからな」

第九話（後書き）

御感想・御指摘お待ちしております。

第九・五話（前書き）

今回は、扶桑の状況をお送りいたします。あいかわらずウィッチは
ほぼ出てきませんが。

第九・五話

~~~~~同期生

夏の瀬戸内海は、この島国には比較的多い気候、つまりは高温多湿という言葉がピッタリとあてはまるところで、思わず海へと飛び込みたくなるような日差しが天から降り注いでいるような場所だった。

ただしそれは、周囲の光景を景色としてとらえ、そのとらえた人物がお気楽な人間だった場合にのみ言える事だ。

たとえばここに存在する内海　瀬戸内海は、その見かけとは全く異なった厳しさを持つ海だった。幅の狭さ、複雑な形状の沿岸と無数に存在する小さな島々に代表される様々な自然の影響を受け、勢いの強い、気紛れな海流が流れていた。平家を壇ノ浦で滅亡させたのもこの海流だったし、毛利家をして戦国に威を振るわせたのもこの海流、そしてこの内海の厳しさを知り尽くした水軍の水夫どもだった。同時に、彼らはこの内海の沿岸に存在する様々な地形が、水軍の素晴らしい根拠地である事も知っていた。

そうした過去を知る人々にとって、明治以前より貿易立国を国家方針として繁栄をしてきた扶桑のそれを常に助けてきた新時代の水軍　扶桑皇国海軍の内地に保有する根拠地のなかでも一、二を争う重要な軍港がこの海に置かれたのは当然過ぎる程当然の事だった。具体的な地名で言えば呉　広島から南東に山をひとまたぎした場所にある世界最大級の海軍基地は、そうした場所に存在していた。

過去の例から言えば、毎年この時期は海軍にとってようやく春に行われた定期的な転勤による人事の変化に司令部の幕僚や艦艇の乗員達が慣れ、そろそろ大規模な訓練も実施されるような時期だった。志願者が大部分の新兵達が？お客さん？としての時期を終え、生まれてきた事を後悔する程の訓練と私的制裁に苦しんでいる時期でもある。

そして、今年もそれは例年のように行われていたが、今年はそれに加え、新たに大規模な予備役の招集が掛かっていた。

「村松、おい、村松じゃないか」

最近、国鉄が軍用に増発している急行で呉駅に降り立ち、その改札を出た予備役海軍中尉村松敏夫に、傍らから突然声かけられた。

「古田、貴様もか」

村松は軍服で埋まった雑踏の中をかき分けてくる大柄な人影を見て言った。扶桑人としてもやや背丈の低い村松よりも頭一つ程大きい古田義弘が、垂れさがった両目に笑みを浮かべていた。彼と同じ、純白の海軍第二種軍装を身に着けていた。階級も彼と同じ中尉短期現役士官教育、いわゆる海軍予備学生の同期生だった。

「これで皆引つ張られたという訳だ」

彼の傍らに来て古田はそう言った。彼は家業の豆腐屋を継いで、神奈川に住んでいる男だった。

「あん？ みんな？」

「知らなかったのか？ 山木は三ヶ月前から呉の航空隊にいる。いきなり乗員召集の紙が来て、そのままだったらしい」

古田はおっとりとした調子で彼らと最も仲の良かった同期生仲間の名を挙げた。山木は、東京で新聞記者をしていた。

「おいおい、それじゃ本当に」

村松はそこまで言いかけて、巡察隊の下士官が自分達の方を困つたような、怒つたような顔で見ているのに気付いた。第二種軍装を着た二人の中尉が、足元に私物のトランクを置いたまま立ち話を始めたのを注意すべきかどうか、迷っているらしい。

「おい、場所を変えよう」

村松はさりげなくそう言うと、トランクを持って歩き始めた。短期現役の期間が過ぎてから三年 千葉にある実家で両親の営む酒屋の手伝いをしていた彼は、海軍の習慣をかなり忘れていた。

古田もにやりと笑って言った。

「そう言えば、もう娑婆にいないんだものな」

二人はわざとらしく下士官の方を見た。あわてて敬礼を送る相手に、久しぶりの敬礼を返す。

「貴様、出頭は何時だ？」

村松は訊ねた。

「明日の正午だ」

「俺も同じだ。したら、飲む時間はあるな。山木を呼びだせんか？」  
「宣候」

三人が本通りにある料理屋兼旅館の？徳田？にうち揃ったのは、その夜の八時頃だった。本来なら彼らの様な予備役士官がこんな場所で宴を張るのは難しいのだが、以前、正規の海軍少佐として呉の粹筋で名を馳せた古田の父親を徳田の女将が覚えていてくれたのだった。

さすがに芸妓を呼ぶ事は出来なかった。呉では料理屋が待合の役割を果たすし、村松はいつものとおり海軍から渡された支度金まで飲んでしまつつもりだったから金銭的には呼べない事もなかったが、今夜は完全に飲み明かす気であったので、あえて呼ばない事にしていた。

「どつやら、本当らしいな」

かなり酒の入っている村松が言った。酒の影響が出やすい体質らしい、鼻の頭が赤くなっていた。それでも普通に周りの音は聞き取れるのか、彼は、あちこちから聞こえてくる海軍関係らしい宴会の騒音に耳を傾けている。

「ああ、本当だ」

ちびりちびりと酒を飲んで山木が答えた。彼は酒というものは  
少らず飲むのが正しい飲み方であり、一気に飲むのは自分の信条  
に反すると日頃から言っていた。

「俺達みたいな半分娑婆の人間を根こそぎかき集めてるだけでも怪  
しいのに、飲みに来てみれば二種軍装シロフクで大入り満員の大宴会だ。戦  
争だよ。それも今までよりも余程大きな」

飲み始めてからしばらくの間続いた騒ぎは終わり、山木の目のした  
には暗い陰が出ていた。疲れているらしい。村松が傍らに固太りし  
た体を転がして撃沈している古田に視線を向けたのを見て、彼は低  
い声で言った。

「こいつは大変だよ。陸戦隊の、戦車だろう？」

まったく、こんな凶体で良く戦車に収まるもんだ、彼はそう言って  
笑った。

日本がこの全世界規模の戦争に参加し、扶桑に艦隊を一揃い、同盟  
の？記念？として譲渡し、更にはその後で海軍が日本に戦艦二隻と  
巡洋艦数隻の購入を申し込んだ（さすがに二度も大型艦艇を無償で  
譲渡してもらうのは外聞が悪い為購入に及んだ。異常な程に格安な  
値段ではあったが）時、それを知った扶桑陸軍中将酒井鎬次は陸軍  
参謀本部にある要求をしていた。

扶桑陸軍の装甲兵力にかねてから不安を抱いていた彼は、陸軍のそ

の貧弱な（と言って悪ければ軽装甲の）装甲兵力を補う為に日本からの戦車、および装甲兵員輸送車の購入を求める上申書を提出していたのだ。だが参謀本部参謀総長であり、内閣総理大臣でもある東条英機はそれを却下、陸軍の全師団にそれを配備するためにはいくらか金があつても足りないというのがその理由であつたが、酒井はそう考えなかつた。海軍にあれだけの艦艇を一揃い、無償で譲渡した日本がたとえ全師団に配備するとはいえ譲渡された駆逐艦よりも遙かに安い戦車ごときに金を要求するはずがない、つまるところ、東条は外国産の兵器が陸軍の主力を成す事が我慢ならなかつたのだ、彼はそう考え、それならばせめて海軍特別陸戦隊だけでも、と酒井以外の扶桑陸軍の装甲兵力信奉者達　その中の一部には海軍のそれも含まれていた　も巻き込んで強硬に主張し続け、その主張が最終的には海軍特別陸戦隊の改編に繋がつたのであつた。

結果、海軍特別陸戦隊は以前の様な幾つかの中隊が連合して編成される様なものではなくなつてゐる。日本から到着した輸送船に満載されてゐた戦車、装甲兵員輸送車およそ一　両の殆ど全てを配備され、さらに大幅な兵員の増員も行われた海軍特別陸戦隊は第一連合陸戦師団と名を改め、世界最大の装甲師団になつてゐた。

もちろん、その様な改変を行つた事で今まで強襲上陸部隊として使われてきた陸戦隊は、あまりにも重装備になり過ぎた事による弊害から強襲上陸戦に用いるには不適當な存在となつてしまつた。だが、その問題は陸軍が解決してくれた。酒井中将の話聞いた今村均陸軍大將が、

「ならば我々が強襲上陸を担当しよう」

と言つて自らの率いてゐた第八方面軍（南洋島防衛兵力）隷下の第一七師団を引き抜いて臨時に海軍の編成表に組み込み（これはのち

に完全に海軍の所属となる）、第二連合陸戦師団と名を改めたのだ。そしてその師団はおよそ強襲上陸に必要と思われる装備の殆どすべてを揃えていた。今まで南洋島が襲われなかった事のおかげで、師団は完全充足状態にはなかったが。

そして、古田はその強襲上陸部隊 第二連合陸戦師団に所属する戦車大隊に配属される筈だった。日本の戦車を装備している第一連合陸戦師団とは違い、一式中戦車を装備した部隊だ。上陸地点が確保された後は、歩兵に代わって彼の部隊が敵の集中射撃を浴びる事になる。彼の所属する陸戦隊は、戦車と艦砲射撃の陰に隠れて前進、<sup>ビーチヘッド</sup>海岸堡を確保して後続の第一連合陸戦師団、そして陸軍部隊安全な上陸拠点を与えるのが任務であるからだ。

海岸近くに仮にネウロイがいた場合に狙うのは、まず、戦車だった。確かに軍艦にもレーザーは飛んでくるが、基本的にネウロイは自分の近くに存在する敵から順に攻撃する為だ。それに、飛行型、もしくは艦艇型でもない場合、ネウロイは陸から見れば遠方の水上に（あるいは水中に）存在する味方の軍艦に対しての有効な攻撃は出来ない筈であつたからだ。結果として、自分の近くにいる敵に攻撃を集中する事になる。そういう訳だった。

「貴様だつて大変じゃないか」

杯にあきたらなくなったのか、ビールを飲み干したあと転がしたままだったコップに酒を注ぎながら村松が言った。

「まだ戦闘機か？」

「ああ、一応はな」

山木はコップに表面張力の限界まで注がれた酒を、一滴もこぼさずに飲み干す村松を呆れた様な目で見ながら答えた。

「でもな、俺が乗ってるのはA7Kだからな」

「もっと一般的な名前で行ってくれ」

「陣風 陣風一一型だ。日本から贈られた空母に載せられていたレシプロ戦闘機さ。今までの九九艦戦や、噂で聞こえてくる三菱の零戦ですら足元にも及ばない、最強の たぶん海軍最後のレシプロ戦闘機だ。ただ、馬力があって、機体も頑丈なんだが、ネウロイ相手にどこまでやれるかわからん。小型ならまだ何とかなるが、大型はな。という訳で、俺達のもっぱら小型相手の空戦や、直協支援の練習ばかりさせられている。制空戦闘は基本的に世界各地に散らばっている日本のジェット戦闘機隊に一任されている。まあ、俺の飛行隊が載る母艦は《天城》だからどのみちジェットは搭載出来ないけれど。でも同じ艦隊に所属している空母は日本からの？プレゼント？の《飛鶴》級四隻だから、いつかは日本と同じようなジェット戦闘機が配備されそうな気がするなあ」

「つまり、《天城》は地上部隊の支援専門の空母という訳か？ 贅沢な話だな」

「仕方ないよ、《翔鶴》級以前の母艦なんて、よくよく設計を見直してみれば航空機の運用には不向きだったり、排水量が小さ過ぎたり、設備が古かったりと、碌な事がない。知ってるか？ 最近では日本からあの《飛鶴》級より大きな排水量七 トンクラスの怪物母艦を六隻、発注した、なんて噂まである。もしそれが現実になつたら、海軍は、今までの母艦は全て地上支援や護衛専門の母艦にしちまうんじゃないか」

「噂だ、噂だよ」

村松はなだめるようにして山木に言った。

「わかってるさ」

山木は頭を軽く振りつつそう答えた。

山木の言葉は、現在の扶桑海軍航空隊が陥っているジレンマを要約していた。

ネウロイとの戦いを受けて扶桑も世界各国と同じようにストライカーを中心に開発を進めているとはいえ、いつまでも九九艦戦で事足りりという訳にもいかなかった。そのため扶桑も航空兵力の新規開発に乗り出していた。それは急ピッチで進行しており、特に当初海軍航空隊の母艦航空隊用に開発された零式艦上戦闘機は、すでに数百機が本土の基地航空隊、そして《千代田》、《千歳》などの旧式、もしくは小型母艦の母艦航空隊に配備されていた。

だが、日本が扶桑に贈った機体は、それらを開発するのが馬鹿らしくなる程の機体だった。端的に言ってしまうえば、技術レベルに差がありすぎる航空機群を日本は扶桑に贈ってきたのだ。

当然、扶桑の航空技術関係者たちはその機体の群れに飛びついた。一部ではあまりにも他国の兵器ばかりに頼るのはどうかという声も挙がったが、それは陣風や、それとともに贈られてきた艦上攻撃機流星がその性能を示すと、その声は急速になくなっていった。

それだけ、贈られてきた航空機の性能は今までの航空機と比べて段

違いの性能を誇っていたのだ（この他にも航空戦闘脚の開発者達もあまり良い顔をしていなかったが、ウィッチの絶対数が不足する事が確実な今次戦争においては、彼らの声はあまり重視されなかった。そう、航空戦力の全てを、ウィッチとする事は出来ないのだ）。

そうした状況の中で海軍が直面している問題は、日本より譲渡された戦闘機、そして攻撃機があまりにも大きく、そして重い事であった。これについては扶桑の航空技術者全体から問題視する声が挙がったが、航空機の性能は大型化する事で保たれているようなものであるから、どうしようもなかった。大型の、重い新型の機体を飛行甲板上で運用し、戦術単位として有効な数だけ搭載するには、航空母艦の排水量が二五トン以上は無ければならないとの研究結果が出されていた。

現在、その条件に適合する空母は、《翔鶴》級と《飛鶴》級の六隻しかない。戦艦から改装された《天城》と《赤城》は排水量的にはこれを満足していたが、設備が古い為、現状でさえ、陣風と流星の整備に四苦八苦していた（そして、この二隻では陣風に続く戦闘機ジェット化された戦闘機は、とても運用出来そうになかった）。

結局、扶桑海軍が新たな母艦を建造するまでに運用できるネウロイに対しての有効な母艦航空兵力は（ウィッチは除く）、《天城》級を含めてさえ七機に満たなかった。最大で一三六機の搭載が可能だと言われていた《飛鶴》級の航空機搭載数が一機程にまで落ち込んでいるのは、やはり航空機の大型化が原因となっている（日本は初め、《飛鶴》にも扶桑が九九艦戦、あるいは零戦を搭載すると考えていたのだった）。そしてこれは、大型ネウロイの対空火力から考えると、大型ネウロイへの攻撃の場合、おそらく三度攻撃隊を出せば攻撃力を失う数だ。

つまり、扶桑が現在建造している《大鳳》級やその後継となる改《大鳳》級、そして先程山木が言っていたような七トンクラスの超大型航空母艦やそれに搭載されるべき新型航空機が登場するまで、扶桑海軍の空母機動部隊は一回使えば半年は戦闘不能になってしまうのだった。

この他にも、大型ネウロイに繋がる問題として、対ネウロイ攻撃兵装があった。

大型ネウロイがその全身から放つレーザーは、艦や対空陣地から放たれる防御弾幕と比べると桁違いの破壊力、命中率を誇る。これに対し、対ネウロイ攻撃兵装の主力は、ウィッチの持っている様々な兵装を除けば、既存の搭載機関砲だけだった。これにロケットが加わる場合もあるが、基本的には、それだけだ。勿論の事、これらの兵器はどちらも敵の間近まで突っ込んで放たねばならない、そして小型以外にはさして効果を上げられない事が判明している兵装だった。これでは望んで損害を増やしている様なものだが、現状ではどうにもならなかった。

連合国軍が共同で、次期対ネウロイ兵器として遠距離から発射できる（そして大型のネウロイにも効果のある）滑空誘導爆弾、電波あるいは赤外線で敵を追尾するASM誘導噴進弾を開発していたが、今のところ誘導噴進弾は開発の遅延により使用不可能、滑空誘導爆弾は搭載可能な機体が殆ど無い為、使用に難があった。

山木はそうしたあれこれを話した後で言った。

「で、仮にその誘導噴進弾が開発に成功したところで現行の世界各国のどの機体でもあんまりにも重いから搭載できない。流星ならいけると思うが、それにしあってRATO 推力増加ロケットがい

る。空中ではよるけて飛んでいるようなものだろうな」  
「命中率と威力はどうなんだ？」

山木が話している間にさらに三本の銚子を空にした村松が訊ねた。

「うーん。聞いた話じゃあ、一五キロ以内に侵入出来れば、編隊攻撃で三割は命中。威力は まあ、実地で、つてところかな。」

爆弾と比べたら遙かに威力は高いらしいけど、こればかりは今現在世界中どこを探しても搭載能力の高い重爆撃機や艦上攻撃機が新しく開発されていないから、誰も新しい兵器の威力がわからないんだ。なにしろその誘導噴進弾ですら、倫敦が襲われた時に日本のフネやジェット機が使ったヤツの威力を見て開発が決定したくらいだからな。一応、滑空爆弾はもうあるけど、やはり搭載重量の関係でうちの流星と、一部の二式大艇みたいな巨大な輸送機にしか積まれている。対ネウロイで有効な航空攻撃能力が限定され過ぎているんだ。ウィッチと日本軍は別として。

ほら、だから戦艦なんかを新しく購入したり、建造なんかしちまったのさ。航空機の攻撃能力が低すぎるおかげで、そしてウィッチの数が少な過ぎるおかげでそんな妙な話になっている。俺達の国は航空主兵主義をとっていたが、それではおっつかなくなっただんな村松は多少酩酊し始めた声で答えた。

「ああ、理由はそれだったのか。『海と空』にも、そんな事が書いてあったな」

彼は、明日、戦艦《尾張》に主計将校として乗り込む事になっていた。

《尾張》は、扶桑が新たな戦艦の建造をするのは、国力の限界から

そして建造期間があまりに長くなりすぎると判断した為日本から購入した戦艦、《近江》級の二番艦だった。《大和》で完成した扶桑の戦艦デザイン、それを色濃く受け継いだシルエットを持つ戦艦だ。もちろん、その戦闘能力も並ではない。五五口径五センチ砲を三連装四基、合計一二門搭載し、最大速力三三ノットを発揮する真正正銘の怪物<sup>モンスター</sup>だった。

村松はその戦艦に乗り組んで、欧州へと赴く事になっていた。

旗艦として戦隊を組む相手は当然の事ながら同級艦の一番艦である《近江》で、そしてその戦隊が所属している部隊は山木の乗っている《天城》も所属する第二遣欧艦隊だった。ちなみに、《近江》、《尾張》ともに購入された、そして就役したのが最近であった為、乗員の練度は余り高くない。

これから欧州にて大規模な作戦を行わんとする連合国の国々は、多かれ少なかれ、扶桑と同じ様な状況に陥っていた。日本から艦艇を購入していたのは扶桑だけであったが、他の国々もみな、比較的新型の艦艇をロンドン港へと集結させていた。その中には、日本海軍も含まれている。そして派遣されていたのは海軍部隊だけではない、連合国の国々はそれに加え、それぞれが今用意出来る陸軍部隊を世界各地から集結させていた。

「畜生」

気の短いところのある山木はうめいた。

「いつそ、全部の兵器を日本製にするか、そうでなけりゃこんな戦争なんか日本に丸投げしちまえばいいんだ！」

村松がそれを聞いて目を剥いたところで、突然、廊下の方から声が響いた。

「おいおい、そりゃ、まずいだろ」

おどけた、冗談めかしたような声音だった。村松が見ると、開け放たれた入り口に平均的な身長 of 海軍士官が立っていた。彼らより幾分年上だったが、その割には、階級が高い、中将だった。

村松と山木はあわてて敬礼しようとした。

「ああ、構わん、ここは君らの宴席だろう？　少し混ぜてもらっ

ても構わんか？」

「どうぞ」

二人は同時に言った。村松は、寝転がっている古田のコップを握った。壮年の中将に酒を注ぎ、安堵したような表情になった。同じ酒飲みだとわかったからだ。山木もそれは同様らしく、いささか緊張が緩んだ表情になっていた。

壮年の中将は、君達は予備役か、それは本当にご苦労な事だなどと言った後に訊ねた。

「確かに全てを日本に任せてしまえという判断は正しい。彼らの兵器はどれも我々の技術力を遥かに上回っているからな。おそらく一年もあれば地球上からネウロイという存在自体が消えている事だろ

う。ではなぜ我々がそれを行わないと思うか？」

「政治的影響だと思えます」

大学で戦史関連の書籍ばかりを読み漁っていた事がある村松が答えた。

「そつだ」

壮年の中将は大きく頷いた。

「たとえば我々が仮に日本に全てを丸投げしたとして、他の連合国の国々がそつだとは限らん。よその国には、その国なりの考えがあるからな」

彼はコップを空にして、村松の手から銚子をもぎとる様にして受け取り、自分で注いだ。

「それに、我が国は日本と同盟を結んでいるのだからその点においても信頼を損なう事になるだろう。考えてもみる。そつなったら、戦後の我が国はどうなると思う？」

「その場合、戦後の我が国の発言権は著しく低くなると考えます。他の国々が揃って参戦している中でそつぽを向くのですから」

中将の手から銚子を取り戻した村松が言った。山木はそんな彼を青い顔で見ていた。

「その通り」

中将は言った。次の瞬間、大きな声で言う。

「俺だつて、出来る事なら日本に全部を丸投げしたいのだ」  
「こんな所で何をしてるんですか？」

廊下から新たな声が響いた。厳しそうだが温厚そうな面立ちの、女性の少佐が立っていた。昨今の例に漏れず、彼女もまたウィッチーズらしい。ただし今三人に聞こえた声の中には、隠しようが無い怒りの様なものが混じっていた。

「君か」

壮年の中将はコップにあつた酒を流し込んでから立ち上がった。

「君か、じゃありませんよ。いいから早く」

少佐は言いかけた。

「まったく、竹井君は少し真面目過ぎるな」

壮年の中将はそう言い、村松達に微笑んで言った。

「本来なら君達のような人間に迷惑をかけぬため、俺の様な職業軍人がいるんだがなあ。ま、もう諦めてもらうより無い。今日のところはゆっくり楽しめ。払いは俺が持つ　竹井君、女将にそう伝えておいてくれ」

「はい」

どこか納得しかねるような表情のまま少佐は答え、次の瞬間、村松達に魅力的な笑顔を見せると、貴方達も大変でしたね、と言い、壮年の中将をささえる様にして去った。



どういうことかしら？

宮藤芳佳がブリタニアに渡って幾日も経っていない頃。ロマーニヤ公国の防衛にあたっている第504統合戦闘航空団戦闘隊長、竹井醇子は、基地から発進した大型の輸送機（珍しい事に日本製だった）で内地に戻る間、ずっと考えていた。

前線と言って良い、しかも多国籍の統合戦闘航空団の戦闘機隊長が突然の解任、そして本土への帰還命令。

妙なのは間違いなかった。

普通ならこういう突然の解任は部隊長が何か不祥事を起こした等の理由が挙げられるが、竹井本人にも、そして航空団司令部にもその事について全く思い当たる節は無かった。

ただ、この命令がどこから出されたのかという事だけははっきりしていた。扶桑海軍遣欧艦隊、その増派部隊である第二遣欧艦隊の現在編成途上の司令部から、この命令は出されていた。

「今までの自分がこなしてきた真面目な仕事っぷりを呪うこったね」  
臨時に地上に置かれた第二遣欧艦隊司令部の長官公室におとずれた竹井と一時間ばかりどうということはない会話をかわしたあとで大倉中將はいった。

長官公室で初めて会った時の第一印象からすでに妙な人間だとおも

つていたが、実際に会話をしてみると、それどころではないことがわかった。彼の態度は、一般市民が考えているような提督のイメージとはかけ離れていた。

「悪いが、君の経歴は考課表も含めてあれこれ調べさせてもらった。で、まあ、祖国は君を必要としている、合衆国風に言えばそう判断した訳だ。はい、これ」

大倉は机の引き出しから封筒をとりだし、竹井に手渡した。それはまぎれもない長官補佐の令状で、きちんと竹井の名前が記されていた。

「それが、君が俺の手下になるという辞令。あーと」

大倉は引き出しのなかをかきまわし、別の封筒をとりだした。

「任海軍少佐、とかいてある。俺の下で動くなら、その程度にはなっておかんと。君は一年で二度の、異例の大出世を果たした事になるわけだ。おめでとう」

竹井の反応をまたずに、大倉は人の悪い笑みを浮かべ、いや、災難かなといった。

「ああ、最後に、これが少佐の階級章だ。今週中に第504統合戦闘航空団の戦闘隊長の引継ぎを済ませて、こっちにきてくれ」

「どうしてなんですか？」

竹井はたずねた。

「いや、それがだね、君」

大倉は相変わらず冗談を口にしているような表情だった。

「俺はまあ、そんなに仕事熱心だという評価を受けた事がない。やった仕事の結果は別として。噂で聞いた事はあるかな？」

「はい、一応は」

「なら話は早い。君は、そんな俺に仕事をさせる目付け役として、そして簡単に言ってしまうえば諸々の雑務役として任官させられたわけだ。君の上からの評価は、至極真面目だと聞いたよ」

第十話（前書き）

扶奉戦争（扶　　扶桑、奉　　ブリタニアでお願いします）

## 第十話

一九四四年八月一六日 夜間

月光を受けて輝く雲海に、ある種の人間が聞いたならばローレライ、  
そう評するであろう歌声が流れていた。

白い雲の波間を、船の航跡ウエーキのように光りの軌跡を描いて一組のウィッ  
チが飛んでいた。

ただし、正式にウィッチなのは二機編隊ロッセを組んでいる二人のうち、  
ソロルの先頭をいく人影だけだ。

サーニヤ・V・リトヴァク中尉。使用機材はMiG60。武装とし  
て手に持っているのは九連装ロケット砲《フリーガーハマー》。そ  
して何より特徴的、そして彼女に夜間哨戒を可能とさせている最大  
のものは、側頭部から突き出したライトグリーンに輝く二基の索敵  
アンテナ、リヒテンシュタイン型魔導針だ。

彼女は、文字通り魔女を思わす歌声を響かせながら、この雲の海を  
飛んでいた。

「不機嫌さが顔に出ているわよ、坂本少佐」

正面で、まるで苦虫をかみつぶしたような表情で腕組みをしている  
坂本を、ミーナが優しく窘めた。

この日、同じ夜の空を飛行しているのはサーニヤのロツテだけではなかった。ミーナ、坂本、芳佳の搭乗するユニカーズ製の輸送機 Ju52も、サーニヤの率いているロツテのすぐ近くを飛行していた。

「わざわざ呼び出されて何かと思えば、予算の削減だなんて聞かされたんだ。顔にも出るさ」

「彼らも焦っているのよ。いつも私たちばかりに戦果を上げられてはね。それに、近頃は日本の海軍がガリアから進出してこようとするネウロイを撃墜しているし、ほら、この間の新聞にも出てたでしょう?」

「それで、せめて私たちだけでもという訳か。連中が見ているのは、自分たちの足元だけだな」

「戦争屋なんてあんなものよ。もしネウロイが現れていなかったら、あの人たち、今頃は人間同士で殺し合いしていたのかもね」

「さながら世界大戦だな」

坂本は自分の下手な冗談に笑った。隣で子供の様に窓の外を眺めている芳佳に振り返る。

「悪かったな、宮藤。せつかくだから、ブリタニアの街でも見せてやるうと思っただのに」

「いえ……。私は、その……軍にもいるんな人がいるんだなあつて……」

言いかけて、インカムから聞こえてくる歌声に芳佳は気がついた。

「あの、何か聞こえませんか?」

「ん? ああ、これはサーニヤの歌だ。基地に近づいたな」

「私たちを迎えに来てくれたのよ」

坂本とミーナが答えた。

「ありがとう」

Ju52に並行して飛ぶサーニヤとソロルに気がついた芳佳は、インカムに呼びかけながら手を振った。

一瞬、チラリと芳佳を見たサーニヤは、頬を染めてJu52の下方の雲の中に姿を隠した。ソロルはそんなサーニヤを確認すると、芳佳に手を振ってから、先導機に追隨して雲の中に潜り込んだ。

「……サーニヤちゃんってなんか照れ屋さんですよね？」

芳佳はミーナを振り返った。

「とってもいい子よ。歌も上手でしょ」

と言って、ミーナが微笑んだ時、唐突にサーニヤの歌声が途絶えた。

「どうした、サーニヤ？」

不審に思った坂本が聞いた。

「誰か、こつちを見ています。ソロル、貴女はどう？」

サーニヤが訊いた。彼女は初めて会った時にソロルに感じたネウロイの反応をいまだに警戒していたが、それを任務にもちこみはしなかった。ソロルからの反応はすぐに返された。

「こちらでも反応を確認。シリウスの方角に不明機体が一、接近中」  
「ネウロイかしら？」  
「はい、間違いないと思います。通常の航空機の数ではありませ  
ん」

その答えに、坂本は右目の眼帯を上げて魔眼を使用して報告にあつた方角を見た。

「私には見えないが？」  
「雲の中です」  
「……そういう事か」  
「ど、どうすればいいんですか!？」  
「どうしようもないな」

慌てる芳佳に、坂本があっさりと告げた。

「そんなあ〜」  
「悔しいけど、ストライカーがないから仕方ないわ」

ミーナがそう言うと、芳佳はハツとして坂本の方を見た。

「あ、まさか、それを狙って？」  
「ありえん。ネウロイはそんな回りくどいことはしないさ」

坂本は芳佳の疑問を一蹴した。彼女にとって、ネウロイとは本能としか言い様のないものに突き動かされている侵略者であり、とても  
の事ではないがそのような知能を持っているとは考えられなかった。  
それに、前例もない。

「目標は依然、高速で近づいています。接触まで、約三分」

「サーニヤさん。ソロルさん。援護が来るまでに、どちらか片方だけで、ネウロイを撃破出来るかしら」

しばしの間を空けて応答があった。サーニヤだ。

「可能です。私がネウロイを、ソロルさんはJ u 5 2の護衛を頼みます」

「了解」

J u 5 2の横にある雲の海から、サーニヤのロツテが姿を現した。ソロルはJ u 5 2に並走する様にして機体の右下方に占位し、サーニヤは手慣れた手つきで空の鉄槌、フリーガーハマーのセーフティを解除すると、J u 5 2から距離を取る様に飛行する。

「迎撃行動に移ります」

「無理はしないでね」

サーニヤを気遣うミーナの隣で、坂本は呆けている芳佳の姿を捉えた。

「よく見ておけよ」

「は、はい」

芳佳は機体の窓に顔を張りつける様にして、サーニヤの姿を追った。

「サーニヤちゃんには、ネウロイがどこにいるか、分かるんですか？」

「ああ。あいつには地平線の向こうにあるものだって、見えているはずだ」

「へえ」

「それでいつも、夜間の哨戒任務についてもらっているのよ。最近  
はソロールさんとロツテを組んでの夜間哨戒が多いわね」

ミーナが説明をしている間に、サーニヤは目を閉じ、魔導針でネウ  
ロイを探り、ソロールが随時伝えてくるものと自身の捉えたものとを  
照合しながら正確な位置を特定しようとしていた。

坂本がミーナの説明を補足した。

「お前の治癒魔法みたいなもんさ。さっき、歌を聞いただろ？ あ  
れもその魔法のひとつだ」

「歌声で、この輸送機を誘導していたのよ」

（歌声……で？）

月明かりに浮かび上がるサーニヤの姿は、さながら現代のローレ  
イの様に、芳佳の瞳には映っていた。

「……あ」

赤く輝くネウロイが高速接近してくるのを、サーニヤは捉えた。ソ  
ロールから伝えられてくる座標情報も目の前のネウロイをさしている。  
探していた敵だ。

機敏な動きでフリーガーハマーをネウロイに向け、トリガーを引く  
と同時に、ソロールへ弾着を確認するよう命じる。

フリーガーハマーの発射口から、三発のロケット弾が飛び出し、雲

の中へ軌跡を残して消えていく。

ソロルが弾着を報告した。

「第一射弾着。一番、近。二番、近。三番、命中」

照準が正しい事を報告から確認すると、サーニヤはそのまま続けて一発ロケットを放った。

しかし、どういう訳か、ネウロイからの反撃はない。

「反撃して……こない？」

サーニヤはさらに数発ロケットを撃ち込むが、やはり反撃はなかった。

「さすがね。見えない敵相手によくやっているわ」

ロケット弾の爆発で輝く雲を見ながら、ミーナは言った。

「私には、ネウロイなんて、全然……」

「サーニヤの言うことに間違いはない」

ロケット砲の残弾数からこれ以上の戦闘は不可能と判断した坂本は命じた。

「サーニヤ、もういい、戻ってくれ」

「でも、まだ……」

「私がいきましようか？ 今なら敵は弱っています。撃墜できると考えますが」

ソロルが進言した。彼女は今日、右翼にNCRG レールガンを装備していた。レーザーライフルはロツテには不適當とされ装備していない。強力だが、取り回しがきかないためだ。反対にレールガンは片手で簡単に、とまではいかないがそれなりに振り回せるため、中距離戦には向いているとされた。

ミーナは一瞬迷ったが、迎撃を許可した。

ソロルは了解と返すとサーニヤと位置を入れ替わり、今度は彼女が先程までサーニヤのいた位置に身体を移動させた。

レールガンのセーフティはすでに解除されている。あとは敵を狙い、トリガーを引くだけだ。

「でも、いつも思うんですけど、ソロルちゃんのストライカーってプロペラがありませんよね？」

芳佳が不思議そうな声をあげた。視線はソロルの脚部に装着されているユニットに向けられている。

「ああ。私も最初はわからなかったんだが、どうやらあの翼 背部ユニットの基部に、ジェットノズルがあるらしい。それと、背部ユニットに追加でつけているブースターが、あいつの推力だな」

「ジェット？ ブースター？」

「要はプロペラなしで飛行する為の推力だよ」

坂本が説明した。

それを聞いて、芳佳はわかったような、わからないような色を浮かべたが、それ以上聞こうとはしなかった。

雲の下は激しい横殴りの雨だった。

「ひどい雨だな。何も見えない」

ネウロイ来襲の報を受けて戦闘空域へと向かう四機のうちの一機、ハルトマンはつぶやく。

「あそこだ」

雲間から光が漏れてくるのをバルクホルンが発見した。同時に、四機編隊の中から一機だけ突出していく者が出た。

「サーニャー！」

単機、速度を上げて光を目指したのはエイラだ。彼女はよく、他のウィッチから何を考えているのかわからないと言われていたが、このサーニャに関するとなると、普段のどこか薄ぼんやりとした態度は吹き飛び、周囲から見れば異常としか思われかねないような（中には怒りを感じる者もいるかもしれない、この日の場合はペリーヌがそうだ）反応を示すようだった。

「ちょっと、エイラさん！」

「……いや、いいだろう」

憤慨するペリーヌをバルクホルンが制した。

「戦闘は終わったようだ」

~~~~~

「では、今回のネウロイは撃墜が確認されたんだな？」

夜間、そして比較的緯度の高い（要は北寄りの）座標付近を飛行していた為に冷えた身体をシャワーで温めてきたバルクホルンは制服の上を脱いだ格好でミーティング・ルームに姿を見せていた。椅子ではキャミソール姿のルッキーニが丸まって眠りこけ、ソファーには坂本、ミーナ、ブラとスパッツ姿のハルトマンが座っている。そして他のウィッチの面々も、それぞれがくつろげる格好をしていた。控えめに言っても、精力旺盛な男性がもしここにいたのならば天国と錯覚したに違いない光景だった。

「私の電探では反応の消滅を確認しましたし、リトヴァク中尉の電探でも結果は同様です」

「ならばなぜこうして集まる必要があるんだ？ 撃墜したのなら、いつも通り解散している筈だろう」

バルクホルンが怪訝そうにたずねた。

「はい。確かに敵は撃墜されています。普段なら、それで終わりでしょっ」

「そう言うという事は何かあるのか？」

シャーリーが訊いた。ソロルはまるでその言葉が聞こえなかったかのように無視して続けた。

「敵は、私が撃墜する直前に不審電波を発していました」

「不審電波？」

「はい」

ソロルはミーティング前にミーナに頼んで用意してもらったブリテン島付近の海図、その中のネウロイとの遭遇地点のあたりを指差した。そこにはひとつの赤い丸印がつけられており、他にもいくつかの赤丸が付近の海域に印されていた。

ソロルは全員が印に注目するのを待ってから続けた。本来、階級すら持たない日本の実験兵器である彼女が正式な隊長であるミーナを差し置いてこのような場で説明を続けるのは異例のだが、今回の事は彼女が最も詳しく説明出来るためにミーナから説明を任されていた。

「ここにつけられている印が電波が傍受された地点です。先程既にヴィルケ中佐、坂本少佐、リトヴァク中尉には申し上げたのですが、ここから発信されていた電波を解読してみたところ、興味深い事が判明しました」

「ちょ、ちよっとまってくれよ」

シャーリーがたまりかねたように声をあげた。

「ソロル、お前、ネウロイの電波を傍受できるのは良いとしても、一体どうやって解読したんだ？ いや、そもそもネウロイの電波っ

てのは解読できるもんなのか？」

シャーリーの疑問ももつともだった。今まで世界中でネウロイは出現してきたが、ネウロイの電波を傍受、ましてや解読した例などは存在しなかったのだから当然だ。

「できます」

ソロルは断固とした口調でいった。

「ここから先は軍機に相当するので詳しい事は申し上げられないのですが、とにかく、解読した結果、私が撃墜した敵は、他の」

ソロルは付近の海域に存在する、さっきまで指していたものとは違う赤丸を指した。

「地点におそらく存在していただろうと思われる敵に向けて発信していて、その発信されていたものというのが先程興味深いと申し上げたものなのですが、敵は、歌を歌っていました」

「歌？」

「そうです」

ソロルは首肯した。敵が発信していたのはサーニヤ・V・リトヴァク中尉、彼女の歌です。

「サーニヤの？」

「はい。彼ら（彼女、かもしれません）はおそらく、歌をコミュニケーションの手段に据えるつもりなのでしょう。今日の行動はもしかしたらこちらと友好的な接触を計りたかったのかも。結局私が撃墜したのであまり意味のある行動とは言えませんでした。もしそ

うであつたのであればそれは大きな前進です、良かれ悪しかれ、交渉というものが出来る可能性があるということなのですから」
「待て」

ソロルの話があまりにも破天荒になりつつあるのを感じて、バルクホルンが口を挟んだ。見回してみれば、他のウィッチたちもバルクホルンと同じ様な事を感じている者がいるらしかった。

「その根拠は何だ？ どうしてお前はそんなに確証をもって言える？」

「はあ」

ソロルはすまなそうな顔をしてこたえた。

「これも一応は軍機に指定されております」

「軍機、軍機、軍機」

ペリーヌがうんざりだとも言うように言った。

「貴女は仲間に対してすら、そうやって秘密を作るのかしら？ 所詮は機械の国、ということですね」

これにはソロルも気に障ったらしい、むっとした表情でやり返した。

「では訊きますが、貴女は軍機として祖国に指定されたものを、愚かしくも同じ飛行隊の人間に聞かれたからという理由だけで話すのですか？ もしそうならば私は貴女と、貴女の祖国に対する認識を改めねばなりませんか？」

「なんですって!?!」

「やめんか二人とも!?!」

険悪となった場の空気を収めるように坂本がペリーヌとソロルを叱責した。

「ソロル、もういい。要点だけを簡潔に述べろ」
「は」

調子を取り戻すように咳ばらいをしてから、ソロルが言った。

「つまりですね、今までに私の話した情報をまとめると、そこからはある一つの推測ができます」

「推測？」

「はい。今回の遭遇で、たとえ友好的であろうとなかろうと、コミュニケーションの方法を携えた敵が我々の前に現れ、そして撃墜されました。ここまでは皆さんに先程説明した通りです。

では、その撃墜された敵が付近の同じ能力を持っていると思われる敵に、そのコミュニケーション方法を使用した電波を発信したというのはどういう意味を持つのか？ ここから導き出される結果は私は一つしかないと考えます」

ソロルはウィッチの皆を見まわした。

「彼らはおそらく近日中に、もう一度我々と接触しに来るかもしれません。今度は歌ではなく、槍を携えて」



一九四四年六月二日の午後、南洋島から飛びたった二式飛行艇が東京湾へとその巨体を着水させた。

川西航空機が作った傑作機として知られる二式大艇から降りて内火艇で聯合艦隊旗艦《長門》へとあがってきたのは紺色の第一種軍装を着込んだ二人の士官だった。若い方の士官は書類鞆を下げていたが、その他には何も持っていない。

「日本海軍の？贈り物？艦隊の指揮をとれと？」

壮年の士官　第七航空艦隊司令官の大倉信繁中將が不思議そうに声をもらった。戦艦《長門》の司令長官公室のソファに沈めた身体を丸めるように動かす。そうすると、彼の体勢は猫背　あまり軍では好ましくないとされている姿勢になってしまう。

（やはりGF長官がうちの司令にすこし甘いというのは本当だったのだな）

隣に座っていた大倉の若い副官は、辛うじて笑みをおさえることに成功して上官を見た。

「そうだ」

大倉はなんだか鼻の頭を掻いた後でいった。

「正直なところを申し上げてよろしいですかね？」
「構わん」

堀悌吉大将が頷いた。彼が聯合艦隊司令長官に任じられたのは、ほんの数ヶ月前の事だった。

「どうせ率いてからはあまり文句も言えんのだ、今ここで言ってみえ」

「ありがとうございます」

大倉は背筋をのばした。彼と堀は海軍兵学校の期数こそ二期近く離れているとはいえ、その後、士官として歩んできた過去において重なり合う部分が多かった。

ただし、その間、両者の関係が対立的なものとならずにすんできたのは、ひとえに堀の性格のおかげだった。堀は極端な現実主義者で理想主義者のなれの果てはたちの悪い現実主義者だ、そう評する者すらいた。彼は大倉が、普段の態度は悪いにしろ、任された仕事は絶対に手を抜かないという事を知っていた。

「自分はついこの前まで　　というか今もですが　南洋島の冴えない基地司令として航空隊を率いていた人間です。そんな自分が日本からの？贈り物？であるあんな強力な艦艇群を率いたところで大した戦果は出せません。せいぜいが、そうですね、やはり自分に似合いなのはよくても地方の基地司令といったところじゃないでしょうか？　たしかに一時期は艦隊を率いた事もありましたが　まあ、無能の烙印を押されただけです」

「君、自分を過小評価しすぎるのは良くない傾向だぞ」

堀は溜息をつくように言った。彼は内心で思った。こいつはこいつ

うところが少し難しいんだ。

「あれは致し方ないことだと実際にネウロイと戦った者なら全てが了解していることだ。内地の、実際にネウロイと直接放火を交えた事のない人間のいうことを気にしすぎるな」

「ははあ、まあそれは」

大倉は少し困ったような口調になって言葉を切った。一言断ってポケットからバットをとりだし、オイルライターで火をつける。

「そういう見方もあるということでしょう」

紫煙をゆっくりと吐き出しながら大倉は言った。彼の目線は紫煙に向けられていたが、見えているものは煙ではなく、どこか遠い昔の情景を見ているように思えた。

「ですが、やはりあれはあまり良い判断ではなかったのじゃないかと自分は考えてしまいます。もう少し、もしかしたら何か自分の預かり知らぬ方法であれば、あそこで死んだ部下のいくらかは死なずにすんだのじゃないか、と」

だから、と大倉は次のような事を言った。

自分はやはり艦隊指揮官には向いていません。それに、艦隊を指揮するということなら山口さんや角田さん、それに五藤さんやみたいな人たちだっているでしょう？ 自分ではなくあの人たちに指揮してもらったほうがきつと大戦果を上げられますよ。自分ではとてもとても。

「君、もう少しい煙草を吸えよ」

あまりにも情けない事を言っていた中将の言葉を聞き終えたGF長官は、自分の机から深紫色のパッケージを二つ三つ取り出して彼に渡した。

それを受け取った大倉は、しばらく金印を見つめてから口にくわえていたバットを消し、押しただくようにしてそれをポケットへおさめた。口元に皮肉な笑みを浮かべて言う。

「恩賜の煙草をいただいても、自分の意見は変わりませんよ」

「莫迦、そんな意味ではない」

堀は叱るように言った。

「では、どうなんです?」

大倉は質問というより詰問に近い口調になって尋ねた。

「山口さん、角田さん、五藤さん、他にもまだ何人か猛将、そう呼ばれるべき勇猛果敢な提督がいる中で、今までネウロイが攻めてこない安全な島で航空隊の司令をやっていた人間を呼びつけて、いきなりあんな強力な艦隊を率いるだなんて、あまりにも妙な話ですよ。もし御怒りならば後で幾らでも頭を下げますが、長官だって、自分と同じ立場に置かれたらそうじゃありませんか」

「これは決定ではないが、各国政府が既に話し合っている事がある。堀はたとえ内心に怒りがあつたとしても、そのかけらすらあらわさずに言った。

「いいね、今の段階ではあくまでも決定ではないよ」

「はい」

「政府は対ネウロイ戦について、反攻作戦の準備が必要だと考えている。それも早急に、そして大規模に、だ」

「その理由はなんでしょうかね」

「日本の参戦が原因さ」

堀は口元を歪めていった。

「より明確に述べるなら兵力の余裕だな。あの世界最強の軍隊を保有する国では、ネウロイに占領されているカールスラントをまず解放するべきだとの認識が強いらしい。ガリアと違って、カールスラントは政府、軍、民の組織的撤退が行えたからな。そしてそれは、我が国の首脳部やブリタニア、リベリオンなどの国々からも支持されている意見だという事だ。もちろん、一番賛成しているのは当のカールスラント政府だそうだが」

「それに、ガリアにはネウロイの巢もありますしね」

大倉はあまりつくりが良いとはいえない顔面に嘲りの色を浮かべた。

「日本ならただの一国で全世界のネウロイを一年もあれば消滅させる事ができるだろうに。長官、知っていますか？ 彼らの空母は、今我が国で最新鋭とされている戦艦よりも遙かに排水量が大きい、二倍近くもの排水量があるのです。しかも彼らはそれを簡単に量産し、あまつさえ、我が国に空母四隻、駆逐艦二四隻を無償で譲渡するなんていうことまでやってなお余裕があるのですよ」

「おい」

堀は意地悪い笑みを浮かべていった。

「それじゃあまるで連中にすべてを押しつけようと言っているよう

に聞こえるぞ、その点は俺も同感だが」

大倉はばつの悪そうな意味を浮かべた。実際、彼も堀も、日本にすべてを丸投げしたほうが早く片付くではないかと思っていたのである。その立場ゆえに大声でその意見をふれまわる訳にはいかなかったが。

「とにかく」

堀はいつのまにかずれてしまった話を軌道修正した。

「その日本の認識とやらで、近日中に反攻作戦が立案されるのは明白という訳だ。そしてその作戦に投入されるのが、既に欧州に在泊している遣欧艦隊と、君が率いる事になる第二機動艦隊だ。欧州に着くまでは第二遣欧艦隊という呼称だがね」

堀は煽るように言った。

「で、話の続きだが、君は内地での評価は先程君自身が言ったようにさほど高くない。しかし、諸外国 特にリベリオン、ブリタニア、そしてカールスラントでの君の評価はことは比較にならぬほど高い。英雄扱い、と言っても良い。知っているかね？ 君が言った？間違った判断？で命を救われた民間人は、数万人以上いるのだぞ」

「おだてたって駄目ですよ」

大倉は言った。

「あんな事、もう一度やれと言われたってできやしません」

一九四一年、大倉はバルト海で、戦艦《比叡》を旗艦とした艦隊の司令を務めていた。

カールスラント本土を攻略したネウロイの追撃を受けたのは、彼が、なんとかカールスラント本土から疎開民を載せた輸送船団を護衛し、護衛隊の司令としてスカパ・フローへ向かう途中だった。

戦力は、中型ネウロイを主力とする敵が圧倒的に優位だった。

が大倉は、足の遅い輸送船、合衆国とブリタニアの戦艦に避退するように命令をだすと、ただちに残りの全艦に突撃を命じ、中型ネウロイの群れに徹底的に抗戦してネウロイの群れを船団脱出までその場に釘付けにした。それどころか、中型ネウロイを四機、《比叡》の主砲で吹き飛ばしていた。大型と違ってそこまで強固な防御を持たない中型ネウロイはいかに旧式とはいえ、戦艦の放った砲撃に耐え切れなかったのだ。

ただ、艦隊もそれに見合った損害を受けていた。《比叡》は大破し、駆逐艦の何隻かは沈んだ。他の艦もその殆どが中破以上の損害を受けていたが、輸送船の損害は皆無だった。

「君は、山口君や角田君、五藤君のほうが適任ではないか、そう言っただね？」

「はい」

「今でもその意見に変わりはないかね？」

「ええ」

「君が挙げた名前から察するに、君はあれほどの艦隊は勇猛果敢な指揮官あつてこそそのものだと考えているようだな？」

大倉はその通りです、と頷いた。

「ならば何も問題はない」

堀は断定的に言った。

「君がああ極寒の海で示した勇敢さは、他国海軍でも、そして我が海軍でも知られている。人事部の馬鹿どもがどれほど反対しようと、君は第二遣欧艦隊 第二機動艦隊の司令長官だ」

感嘆の声をもらしたのは、大倉ではなく彼の副官だった。



家系的に述べるならば、扶桑皇国海軍・大倉信繁は、他人が高級軍人とはこうあるべきというものをまったく持っていない人間だった。まず、いわゆる士族の出身ではない。

彼の周り、というより軍にいる織田だの丹羽だの島津といった連中はもともと先祖代々士族であったり、実際、本当にその名の通りの系譜に連なる家系だったりする事があるのだが、大倉の家の場合は

そのような言い伝えも証拠も、何もなかった。

無論、幼少期の誰しもが程度の差こそあれ、自分の家系に多少は興味を持つ時期に大倉はまだ存命だった祖父に何か興味をそそる事はないだろうかと聞いてみた事はある。結果は　さあ、知らないな、多分、下野あたりで百姓でもやってたんじゃないか、といういい加減な答えが返ってくる程度のものであったが。

同時に、大倉は維新後に成立した新たなパワー・エリート階層の出身者というわけでもなかった。たとえば海軍士官の場合、その父親も海軍士官という例は決して珍しくなかったけれども、大倉の場合は違っていた。

少々、書痴癖のあった彼の祖父は、別にどうということもない小さな商事会社を定年まで勤め上げた、休日には古本屋で買い込んできた歴史群像系のあやしげな設定がなされている本をめくるのだけが楽しみという男だった（もともと、大倉自身はたまにしか会うことがなかったので実際にその光景を見たことはなかったが）。

子供の頃、そんな祖父の家の書齋に入った大倉が本棚を色々探しているときに見つけたその手の類の本を祖父のもとへ持っていくと祖父は決まって機嫌が良くなり、おお、信くんもこれに興味があるのかい、だったら持っていくといいよ、と言って持っていった本を大倉に貸すのが常だった。

祖父の家には他にもそれらの小説のほかにも、そういった物のもととなった真面目な歴史関係の古い書物や、どこから手に入れたのか定かではないような焼き物などが置いてあった。そして長い休みなどで訪れた時にそんな家の中を、探検、などと称して祖父のコレクションの品々を探し回る大倉を見ては、嬉しそうに笑っていた。

父については、祖父とはかなり印象の異なる記憶がある。

大倉の父は、まだネウロイが現れる前に人間同士の間で行われた扶奉戦争に従軍した後、私立大学のガリア語学科をそこまで高くもなく、低くもない平凡な成績で卒業して一般の製菓企業に勤めた会社員だった。子供に、食べる事と学校に通わせる事で何の苦勞もさせなかったという点を除けば、大した男ではなかった。扶奉戦争で海軍に召集され、印度洋海戦で当時聯合艦隊旗艦であった《三笠》が爆沈した瞬間を《敷島》から目撃したという一つばなしを除けば、これといった英雄的な体験を持っているわけでもなかった。

子供の頃の大倉がおもしろがったのは、旗艦を突然失った聯合艦隊がどのようにしてブリタニア東洋艦隊を打ち破ったかではなく、父がまるで見てきたかのように語る信長の戦歴だった。

父の話は信長が　というより織田家が　まだ尾張の一豪族に過ぎなかった時代から説きおこされ、家督相続、尾張統一、桶狭間の戦い、清洲同盟、美濃攻略……本能寺の変、天王山、小田原平定、勝家謀叛、三州動乱、そして一六二二年南洋島発見へと至る一人の男の人生のほとんど全てを網羅していた。やがて大倉は、それらの物語を父よりよほどこと細かに覚えてしまった。

食事の時に親子二代、信長がもつと早くに歴史から消えていたら世界はどうなっていたか、などとちもない議論を交わしたりした事もあった　結局それは、議論途中で家庭内で最大の権力者だった母の、どうせまた喧嘩になるのだからおよしなさい、の一言で打ち切りを余儀なくされたが。

幼少期の思い出としてはなんともマニアックなものではあるが、印

度洋海戦の体験談よりそうした歴史の方により濃厚に刺激されてしまう大倉がかなり奇妙な子供であった事もまた間違いなかった。

小学生の頃、祖父とともに行った本屋で見かけた太田牛一の『南海ナンカイ覇公記』の文庫版として復刻されたものを古本で読み、読書感想文で桶狭間がどうの、本能寺がどうのと書いた程だから、どうも、あとになってから？少々？変わった人間として知られる要素はすでにその時には出そろっていらしい。

大倉が心理的な意味での父親殺しができたのは、兵学校に入ってから信長だけではなく欧州史にも強い興味を持ち（このあたりは、架空戦記物　というよりSFものが好きだった祖父の影響かもしれない）、あちこち調べていた後、休暇で戻った実家の父の本棚に、信長に関するあれこれ以外の古い本を見つけた時だった。

そこには、マルコ・ポーロや、文学ロマン派などと称する人々によって書き上げられた、どこからが現実でどこからが妄想かすら曖昧な、特殊な書籍が堂々と並べられていた。

もちろん彼は、一応の精神的自立をすでになしとげていたから、それについて父親に一言も言わなかった。ただ、兵学校に戻る日、ちちにちよつとこれ借りていくよ、と言っただけだった。息子が独立した人間となったことを意外な形で示された父は多少複雑な表情を浮かべたが、次の瞬間にやりとして、まあ、隠れて読むんだねと言った。

兵学校と言えば、大倉が海兵第四八期学生として江田島に足を踏み入れる事ができたのは、彼のそれ以前の学業成績から考えるならばまったくの奇跡だった。本人もその例外ではなかった。

彼は、父に勧められて海兵の試験を受け、奇妙な事に何の問題もなく難関中の難関を突破してしまった。といつても、入学時の順位は下から数えるべき順位で、海兵に存在する（と噂されていた）高級将官用の子弟枠内だった。どうやらその年はあまり成績のよろしくない子弟がいなかったようで、そのかわりに大倉の入校が許されたらしかった（その他に、やはり信長好きで父の友人だった予備役の海軍大佐があちこちに口を利いてくれたことの影響もあったらしい）。

そうしたあれこれはやがて大倉にもわかってきたが、入ってしまったばこつちのもの、べつに文句もなかった。

彼はたいていの部分においてひどく享乐的な人間であり、現実が自分の都合にあっているならば、あえてそこに問題を見つけ出そうとはおもわなかった。

この性格的な特性は砲術士官として様々な勤務をこなした後も変わらなかった。

そんな彼が海軍大学校を出た事、そしていまや第二遣欧艦隊の司令長官である理由は、多くの海軍士官にとってこの世に時たま発生する不可思議としか思われなかったが、一応、まともな理由はついていた。

砲術士官として効果的な砲撃陣型、防空陣型、そして途中から対空回避行動の研究を行っているついでに洋上航空作戦全般の専門家にもなってしまったというのだった。短期間ではあるが欧州への留学も経験している。もつとも、真面目な勉強よりも、戦例研究と称してロマーニヤ、ヴェネチアの戦跡を見て回る事が多かったが。

ともかくも、大倉信繁とはそういう人物だった。

であるならば、その専門家に対して、空母そして戦艦の両艦種が主導的な役割を果たし、そして欧州諸国家で広く、そして好意的な印象を持たれている攻撃的な作戦を遂行できる提督を探していた海軍が、遣欧艦隊の主力となる第二機動艦隊の司令長官に任命した事は何の不思議でもなかった。

ただし大倉自身は、自分の事を攻撃的ではないと考えていたから、この任務に対してさほどの熱意を覚えていたわけではなかった。彼は幾つかの限られた意味においてひどく有能な軍人だったが、それは好戦主義者と同義というわけではないのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7788m/>

ストライクウィッチーズ 二次創作

2011年3月12日17時21分発行